
魔法先生と竜人と吸血鬼と.....

綾波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生と竜人と吸血鬼と…………

【Nコード】

N0331I

【作者名】

綾波

【あらすじ】

……………ある日俺は転生した。……………見知らぬ土地で初めて出来た友達との約束の為に俺は、麻帆良に行く事にした。……………そこで良い人生が送れるように……………

人生enjoy!したいな? (前書き)

とてつもなくエヴァとの絡みを書きたくなったので投稿させて貰いました。……こんな駄文ですが読んでくれるととても嬉しいです。……ではよろしくお願いします。

人生enjoy!したいな？

困ってます。

めっさ困ってます。

実妹だと思ってた妹が 義妹だったと言われたぐらい困ってます。

え？何が困ってるって？

いや、ついさっき信号無視してきたトラックに引かれて頭を強打。

血が惜しみなく流れて、意識が無くなっていく中

「ああ俺ここで死ぬのか……………」と思いながら意識を手放した。

……………うん、ここまでは普通！なのに

「間違つて君を殺してしまった。だから第2の人生をあげよう。」

……………これだよ。

俺の困ってる理由。

いきなりそんな事言われても……………なあ？

「困惑してるようだな。転生先は『ネギま』の世界で良いな？」

おい待てよ！勝手に決めるなっ！

せめて白い悪魔のいるところで！

「では行ってみよう」

ジジイの掛け声と共にまた意識がブラックアウト……………。

……………覚えてろよジジイ！

「あつ！君はついてるね」転生先も能力も面白い！」

……………最後の最後までふざけやがって！

この言葉が転生？前に聞く最後の言葉になった。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

「……………知らない天井だ。」

……お約束だよね♪

俺は取りあえず起き上がり周りを見渡した。

「……なんか人らしき物が沢山死んでるな。」

ちよつと待て！

死んでるって何だよ！

っーか気持ちと言葉が違うんだけど！

俺は、気持ちを何とか落ち着かせ人らしき物を見た。

肌が所々ウロコに覆われ中には翼を生やした物もいた。

「……………これは人ではないな。」

ごもつとも！

人っーかウロコ人間？

……キシヨ。

そのウロコのような肌に触れようとし自身の手を伸ばした時

「……！」

自身にもウロコが付いている事に気づいた。

俺は慌てて鏡を探し、自身の体を見た。

見た目16歳ぐらいに緑髪、灰色の目をした男。

……なのに両腕にはウロコが生えていた。

「……！」

……ヤバいって髪が緑は漫画の世界だから良いとしよう！

なのにウロコってなんだよ！

つーか転生じゃなくて憑依だろ！

ちゃんとしろよジジィ！

つーかこれから

「どうしろっていうんだよ！」

「どうするも死んで貰うよ？」

……… what？

誰だこいつ？

いきなり出て来て死ねってなんだよ！

「………こいつらを殺したのはお前か？」

「そつだよ♪竜人のウロコや翼は裏で良く売れるんだよね♪………」

だから結界で弱らせ悪魔に襲撃させたのだけど………君は良く生きてるね？」

「……そんな事どうでもいい！どうしてくれるんだ！」

そうだよ！俺は、どう生きれば良いんだよ！

「だから死んでよ」

そう言うつと男は懷から銃を取り出し俺目掛けて撃ち放ってきた。

「くっ！」

回避しようとして横に跳ぶが一発当たってしまった。

「あれ？避けるんだ。

僕の魔法銃は改造してあるから避けにくいと思ったんだけど？」

「……止まって見える。」

嘘です！さっきのとても痛かったので撃つのやめてください！

「へえーじゃあこれは？」

男は俺に手をかざし

「魔法の射手連弾・氷の22矢！」と唱えやがった。

迫る22の氷の矢が俺に向かってくる。

「なにか無いのか!？」

盾をplease!盾をください!

俺が防げる物を探してる中、あの男は……

「あはは!やはり銀竜人は過去の遺産だね!」

……と抜かしやがった。

……何故か感情が高ぶる。

それと同時に防げる自信が生まれた。

side 男

氷の矢が直撃した。

立ち上る爆煙が威力の高さを物語る。

こりゃ仕留めたな!

「銀竜人のウロコは手に入らなかったが竜人のウロコは十分に集まったな!こいつのも剥ぎ取って帰るか。」

……銀竜人。

古竜の恩恵の元に生まれし最強種。

過去に何度か目撃されているが、殆どが普通の竜人との見間違えだ。

「いたとしても俺にはしとめられないしな。」

……古竜のパワーが人間サイズに収まり、馬鹿げた魔力を持っている化け物。

ハンター一人ではたおせないな。

思いに更けながら爆煙が晴れるのを待った。

「！……！……何だよあれ！？」

……俺は開けてはイケない箱を開けてしまったのだろう。

爆煙が晴れた先には、銀色の翼で身を守る一匹の竜人がいた。

人生enjoy!したいな? (後書き)

すみません。エヴァがまだ出て来ません。頑張つて速く出てくるようにします。

頭いたい！(二日酔い)

俺は困ってます。

え？前と同じか？

違うんだよ。

男が放った22の矢が目の前で止まってるんだよ。
しかも俺の体も動かない。

……今すぐ逃げたいのですが。

『逃げるなんて言っなよ。』

……what？

いきなり話しかけるのが今の流行り？

『そんな訳ないだろ。』

……Im cool

良し！落ち着いた！

『落ち着いた所で本題に入るけど、君は生きたい？戦いたい？』

……プライバシー無いな。

『……時間が無いから早くね。』

生きたいか戦いたいか？

そんなの戦いたいに関わらず！

『……何故だい？』

生きたいだけなら、前にいる男に殺される。

戦って勝たなければ生き残れない！

『……わかった。なら君は強くなる。』

強くね。

どうやって？

『金か銀の竜をイメージするんだ。後は僕がやるよ。』

金か銀ねえ？

火竜か雌火竜？やそれよりは鋼龍がいいな！

『……イメージ出来たかい？』

OKOK！

……で、どうすんの？

『イメージの竜と君を憑依させて君を金竜人が銀竜人にする。』

……普通の竜人とどう違うの？

『教えたけれど時間が無いね。攻撃を受けたいならいいけど？』

OK OK！

また今度教えてよ！

『うん♪また会おう。……取り敢えず君は背中に力を入れてね♪その後線は爪で引っ掻けば終わりだよ。』

わかったぜ！

……最後に一ついいか？

『……何だい？』

あんたの名前は？

『ふふふ♪ノノだよ♪』

OK じゃあな ノノ！

……さて言われた通り背中に力をいれるか。

side 男

「……………本当にいたのかよ。」

俺の前には銀の翼を広げ身を守る一匹の竜人がいた。

「……………翼か、使えるな。……………後は線か。」

俺と竜人の目が合う。

灰色だった目が変化した瞬間、首を落とされた。

……………いや、着いてる。

何だ今のは？

濃厚すぎる殺気で自分の『死』がイメージされる。

「冗談じゃねえ！こんな化け物とヤレるかよ！」

次元が違いすぎる！
俺は逃げ出した。

……なのに奴は追って来ない。

………何故？

恐怖より疑問心が勝ってしまった為、後ろを振り返る。

奴は俺の方をじっと見つめて………

「命が惜しいなら、ここには近付くな！それでも立ち向かうなら……
『死』を与える。」

………また首を落とされた。

………イメージなのにリアル過ぎる！

「くそ！覚えてろよ！」

………復讐だ！

10年いや15年たったら絶対にテメエのウロコを貰い行ってやる！

俺は復讐を胸に誓い転移魔法を発動させた。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

……………帰ったか。

一応脅しておいたし、もう来ないよね？

それよりも『直死の魔眼』って何だよ！

赤松作品って確か殺し御法度の世界だよね！

てか、何で俺が使えるんだよ！

っ！か作品違うし！

『慌ててるね♪』

ノノか！説明プリーズ！

『うゝん。詳しくは判らないけど、君の脳は学習能力が高いつてことかな？』

意味がわかりません！

『君は『死』を二回経験している。

一回目は自身の『死』。脳は初めての事で理解出来なかったけど、二回目の憑依先の僕の『死』によって君の脳は『死』を理解し、『死』を見ることが出来る様になった。』

……つまり経験値が溜まり『死』が見える様になったと？

『そういうこと！』

……あ〜う〜ん。

うん！『直死の魔眼』は使わない様にしよう！

『どうして！君の強い力だよ！』

さっきも言ったが、殺し御法度の赤松作品で殺人なんか出来るか！

『……君の言ってる事が理解出来ない時があるんだけど？』

ノノには、判らなくていい事だ！

『……君が決めた事なら文句はないけど。……これからどうするの？』

そ〜だな。

取り敢えず、気と魔法を教えてよ。

『……どうして？』

暫くは、ここを拠点にするから、さっきの男の様に殺しに来る人達がいるかも知れない、だから守る力が欲しいんだよね。

『……いいけど、条件があるよ。』

条件とは……

出来る限りの事ならやるぞ。

『簡単な事さ。……仲間達を葬ってあげて。』

……。

『まだ16年しか生きて無くても、大事な仲間だから……。』

……。

『僕は、この集落出身じゃなくて拾われた子だから。……家族がいなくても生きていける様にしてくれた仲間だから。……お願いするよ。』

……。

……。

……水臭いぞノノ！
言われなくてもやるつもりだったぞ！

……それに、俺はノノの事を家族だと思ってる。

『！……！……ありがとう。』

それが、この日最後の言葉になった。

え？仲が悪くなったか？だって？

………違うよ。

初めての戦闘

精神的にキツイ。

仲間の墓を作る事

結構人数いるね。

初めての魔眼の開眼

疲れが半端ね〜。

………トリプルコンボにより、ノノの家で爆睡した。

話し相手〃ゲームのキャラ。 (前書き)

まだエヴァが出ないのか!っと言っ皆さん。…………ごめんなさい。
作者に、作文の才能がないので、もう少しお付き合いお願いします。

話し相手〃ゲームのキャラ。

俺は困ってます。

なにがって？

いや、衣食住は大丈夫だったんだだよ。

近くに川が流れてるから、魚は穫れるし狩りも簡単に出来るスペックだったから。

なら何故困ってるかって？

いざ魔法の練習をしようとしたら、
ノノがなあ。

『あつ！言い忘れてたけど、僕って生まれつき呪文詠唱ができないから』

……………なんて言いやがる。

オイオイオイ！

折角、魔法の世界に転生したのに魔法が使えないってなんだよ！

『僕も最初は落ち込んだよ。でも竜人だからブレスもあるし竜化もあるから大丈夫！』

……やべ。

高畑先生の気持ちがあった気がするわ。

うん？高畑先生？

そうだよ！高畑先生だよ！

なあゝノノ？

カンカホウ？だっけ？

それって出来る？

『良く知ってるね？』『気と魔力の合一』だよね？………やった時無いから判らないけど、多分できるよ。』

OK！やってみる！

確か自分を無にし、左手に『魔力』右手に『気』を。

そして合成させれ

『ああ！竜人の魔力と人の魔力は違うからね♪』
言うの遅いんだよ！

竜の魔力と気が合成される。

体の奥から得体の知れない力が上がってくる。

そして俺は神々しい光を放った。

自分の放った光に目が眩み、目を閉じたが直ぐに視力が回復した。

「……………どうなったんだ？」

俺は現状を把握するのに精一杯だった。

所々ウロコだった腕が鋼の腕に変わり、翼が生え尻尾も生えていた。
何より頭が口元以外、竜になっていた。

……………ノノ？説明。

『うーん。竜人と竜体の間かな？』

……………何だよそれ。

『竜人は力を抑えている状態、人間と共存出来るように産み出された状態……………翼は出せるけど。』

竜化は力の解放、『氣』を莫大に組む事で元の姿に戻る。……………

体も大きくなるけど。』

……つまりワン〇ースで言う人型・獣人型・獣型の中の獣人型ってことか？

『例えが判らないけど、たぶんそんな感じ。』

……結果オーライだよな？

『そうだね。普通の竜人には出来ないから。』

……取り敢えず、メシにするか？

『そうだね。』

……何故か知らないが、今宵の夕飯は豪華になったのはここだけの話。

……ついでにこの状態の事を『竜装』と呼ぶことにした。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

どうも、俺です。

月日が経つのは速くて一年になります。

俺は現在、修行中とでも言いましょうか？

いや、竜人の時に出来る事は大体把握したし、竜化も問題なく出来ただけど、『竜装』の制御が出来ません。

ただ『なるだけ』なら一日中なれるんですが、『気』を使い始めるというの間にか『竜化』になってしまうのですよ。

魔力と気の丁度良いバランスで『竜装』状態になれるのに、『気』を使い始めるとバランスが崩れ『竜化』してしまう。

ノノいわく

『使う』『気』の量を感じて『竜装』の『気』と混ぜられないようにするしかないね』

……………だそうです。

言うのは簡単だが、結構難しいぞ！

そんな訳で今も練習中。

「ギシャアアアオ！」

『ほら！『竜化』してるよ！戻って戻って！』

「グルルル……………」

そんな訳で、ここ半年中ずっと吠えています。

……………そのせいで、

「あの山には凶暴な竜が住み着いている」ってウワサが広がり誰も近付いてきません。

付けられた名前が『逆鱗山』。

命を狙う人以外は歓迎するのに……………。

え？誰からウワサを聞いたって？

……………小鳥さんだよ♪

つかマジ人と話してゝんだけど。

話し相手が自分の内なる存在ソウと小鳥さん達だけってなんだよ。

……………神様！

話し相手をください！

キャラ紹介

シャル・N・ダオラ

腕に銀色のウロコが生えており、緑の髪に灰色の目をした銀竜人。

口調と気持ちにズレがあるが、基本的にはのほほんとしている。

銀竜人は、吸血鬼の真祖と同じく最強種とされている種族だが絶滅されたと残されている。

〈能力〉

・竜人状態

銀竜人としての身体能力と『気』を扱う。

翼を出して戦う事も出来る。

プレスも吐けるが、本来よりランクが2つ程さがる。

・竜化状態

シャルは鋼龍をイメージした為、3メートル程の鋼龍になる。

常時『風の守り』が発動しており、認めた人以外は近づけない。

また、言語が話せなくなる。

・竜装

体型と口元以外を竜に変える。見た目、竜装備した騎士を想像させる。

シャルの現在の最強状態で、『風の守り』やブレスをランクを落とさず使う事が出来る。

↓全ての状態に当てはまる物。↓

・直死の魔眼

2度の『死』を経験した事により、開眼した。

また、ノノ自体も『直死の魔眼』とは違う『魔眼』を持っていた為、開眼したとされる。

『直死の魔眼』は、死を形として視ると書いているがそれは死ではなく、物質の寿命、発生した瞬間に定められた存在限界を読み取っている、と言うのが正しい。

↓竜人と銀竜人の違い↓

竜人は、竜の血が流れている者の事を言い、流れる竜の血を『気』で活性化する事で竜になれる。

竜の血は、常に活性化し竜になろうとするが、竜人にはその血を抑える技法を知っている為、常に人型になっている。

しかし、銀竜人は、竜の恩恵により産まれる為、竜自身が人型に納まろうとする。

だが、銀竜人は竜人が『血』を抑える技法しかない。

当然ながら力全てを抑えることが出来ず、体に竜の痕跡が残ってしまう。

探し物は何ですか？（前書き）

エヴァ、（*、D）ノ やっと出た。

探し物は何ですか♪

神様ありがとうございます！

……じゃなくて

俺は困っています？

え？なんで疑問系なのか？だって？

……目の前に人+αが倒れてるからだよ！

取り敢えず、このままだと風邪引くから持ち帰るか？

『幼女に手を出すとか終わったね君………』

出すか……！

……でも久しぶりに見る人で嬉しいな♪

side エヴァ

………キツいな。

魔法使いどもの国も、あつちの世界と同じで受け入れてくれないか……。

なんの希望を持って魔法使いの国に来たんだか。

……殺さなければ生きられぬ。

……ならば速くあの技法を完成させなければ。

街を通り過ぎる中、街人の話し声が耳に入った。

「聴きました？また逆鱗山で竜の雄叫びが聞こえたんですって！」

「またなの！？やゝね。

山菜を採りにいけないじゃない！」

「速く退治して欲しいわ。」

そう一つの山を指を差しながら話していた。

……いるだけで存在を否定されるか。

私と同じだな……

そして私は指を差ししめされた山。

……逆鱗山に足を向けた。

「……御主人アノ山ニイクノカ？」

「人前ではなすな！……皆から邪魔者扱いされてる竜に興味を持ったのでな。」

「ケケケケ、ソイツハ楽シミダゼ！」

ああどんな奴か楽しみだよ……………。

……………

……………

……………

……………

……………

…

…………… なんだこの山は？

入った瞬間、魔力を吸い取られるだと！

異常過ぎる！

最初は微々たる物で気付かなかったが、奥に進むに連れて吸い取られる量が増えるだと！

「ケケケケ、御主人コノママダトヤバイゾ。」

「わかっている！……………しかし引き返す体力も魔力もない！」

「ケケツケ……………討ツ手ナシカ。マイッタ……………。」

話している中、チャチャゼロは、糸が切れたように倒れた。

「チャチャゼロ！クソっ！私も限界か！」

……視野がぼやけてくる。

……誰か近付いてくるが、意識が朦朧に……。。

「……………ここはどこだ。」

私は森の中で意識を無くしたはずだ。

なぜ家の中にいる！？

周りを見渡すが、人が住んでる痕跡はあるが、人がいない。

「……まったく、なんだん！ 誰だ！」

いきなり開いた襖に反射的に反応してしまった。

そこに現れたのは、緑髪の一人の青年だった。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

「——誰だ！」

わあゝお！

ビックリ！いきなり誰だは無いでしょう！

「……人に名を聞く時は自分から名乗るのでは？」

「クツ！………エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。……」

貴様は！？」

「俺の名は………」

……やべ〜！

俺って名前なに？

名前何て呼ばれなかったから考えてなかった！

『……一年もよく生活出来たね。』

う、うるへ〜！

ノノは、俺のこと『君』や『おい！』しか呼ばないじゃないか！

『……どうでも良いけど、さっきからあの子が不信な目で見てるよ』
『』

な、なに！

人付き合いは、最初が肝心だつて言うのに！

『は〜や〜く〜』
『』

あ〜う〜んえ〜と……

よし！決めたぞ！

「俺の名は、シャル・N・ダオラだ。」

うん！我ながら良い名が浮かんだぞ！

『……Nってなに？』

ノノの事だ！

俺らは、2人で1人だから名前にも入れたかったんだ！

『ふうん、君ってやつは優しいね♪』

……ストレートに言われると照れる#

「ふん！何だか喋る剣みたいだな前だな。」

「……ほっとけ。」

ぐはっ！指摘された。

つかテイ○ズ知ってんの！？

「それより貴様に聞きたい事がある。………何なんだこの山は？
魔力を吸い取る山何て聞いたとき無いぞ？」

………what？

魔力が吸い取られるって何？

俺ここで一年は、暮らしてるけど、そんなの気づか無かったよ！

『それは君が、竜人だからだよ。』

………もっと詳しく説明してください。

『この山は竜人の集落で、よそ者を拒む結界が張られてるんだよ♪
……だからあの子は、結界の効果で魔力を吸い取られたってわけ。』

なるへそ！便利な結界だね♪

『ほら！あの子にも言っただけなよ！』

OK！boss！

「ここは、竜人以外を拒む様に結界が張ってある。

……悪かったな。」

「ふん！私にも責任はある。……しかし、この山を降りる時また魔力を取られなければならないのか？」

……どうなのboss？

『君のウロコをあげて。

そうすれば結界は、あの子を除外するから。』

OK！boss！

「……俺のウロコを持つてると良い。

結界は、作動しない。」俺は腕を捲り、ウロコを一枚引きちぎった。

……なんかカサブタを取るような感じだな？

「これを持って降りれば……どうした？」

なんかエヴァったら、目を大きく開けて驚いてるよ。

……すんげ〜カワイイ。

「き、貴様は竜人じゃなかったのか!？」

「いや、竜人だか？」

「嘘を付け!私が会ってきた竜人は、腕にウロコなんか生やして無かったぞ!」

……あれ?ここの人達ってみんな生やしてなかったっけ?

『君忘れてるでしょ?』

ここは、銀竜人の末裔が集まった集落だよ?
みんな銀竜人の痕跡が残っているんだよ。』

なるへそ。基礎は出来ていて、覚醒するかはその人の頑張り次第って事ね♪

「……俺は竜人の中でも最強種とされている銀竜人だからな。他とは少し違う。」

「さ、最強種!？」

「ああ、それがどうした？」

何か考えているのか、それとも迷っているのか、仕切りに頭を動かしている。

そして決心したのか、こう聞いてきた。

「お前は、最強種として不幸になった時はあるか!？」

……なんて聞いてきた。

不幸ね。

生まれて一年だからうまく解らないなあ？

いや、精神年齢なら二十歳以上だけど。

俺は悩んでいるとエヴァが、

「やはり引きこもりの一族には不幸はないか。」

って言うてきた。

……なんか引きこもりって言われちゃったよ。

どうするノノ？

『……僕の言う事をそのまま伝えて。』

……OK、ノノ。

探し物は何ですか？（後書き）

時間軸がおかしいんじゃないか？と思われる方！……すみませ
ん。見逃してください。

喧嘩する程仲が良い？（前書き）

シリアスは苦手です。

喧嘩する程仲が良い？

side エヴァ

「やはり引きこもりの一族には不幸はないか。」

……やはりコイツも他の奴と同じか。

しかし、なんでこんな事を聞いたのか……

同じ最強種だから興味をもった？

いや違う……。

私はコイツに確かめなければならないのだ。

「どうした？引きこもり？ 久しぶりに話すから上手く話せないか？」

……つまらん。

やはり答えはないか。

なら明日朝一番に山を降りるとしよ……

「不幸か判らないが……」

「うん？」

お！語り始めた。

どれ、私を満足させる返事は来るのかな？

「ここは、銀竜人の集落だと言ったな？

……しかし村人を見たか？」

「……いや」

そういえばココは、村なのに賑やかさが無いな。

……いや、それより人の気配もしない。

「ココは、一年前に魔法使いの襲撃によって壊滅された。」

「嘘をつけ！最強種を語る一族の村が魔法使い如きに遅れをとるか！」

コイツが宿している魔力だって馬鹿げた量だ！

冗談に決まっている！

「確かに銀竜人は最強種。……しかしココの人全てが銀竜人ではない。」

「……どういう意味だ？」

「正しくは銀竜人の末裔の集落。……銀竜人の要素は持つが銀竜人ではない。」

「……………」

「覚醒しなければ普通の竜人より弱い一族だ。……だから結界を張り、他種族を拒んだ。」

「……………ならなぜ襲撃される？」

「……ああそうだ。

賞金を賭けられている訳でもないのに……

「最強種の名は伊達じゃない。……例え力が無くても内に宿る力は絶大。……怖がる奴もいるさ。」

「っ！……！」

「……奴も周りから恐れられる存在か。

「まあ、ウロコが欲しいってのもあるがな。」

「……………？」

「俺にウロコが生えている事を驚いただろ？」

銀竜人は力があまりにも強力な為、竜人のやり方では完全な人型になれない。

結果がこの腕だ。

……そして竜の鱗は、高値で売れる。

さて、問題だ。

……竜と人を狩るのはどちらが簡単か？」

「……人だな。」

「ご名答だ。」

「しかし、この話と不幸と何の関係がある？
まさか、最強種に生まれた事が不幸だとしても？」

「それこそまさかだ。

俺が思う不幸は………

……不幸と思う事が不幸だ。」

「………はあ？」

「俺は、最強種として生まれて命を狙われる存在だ。これは、生まれた時から不幸を背負っているだろう。だが俺は、不幸だと思ってわいない。」

「……なぜから俺には夢があるからだ。」

「夢だと!?!」

「ああ、一つは世界を見て回りたい。もう一つが……」

「……人並みの幸せを掴む事。」

「……なんだと。」

「こいつは!」

「馬鹿かお前は! 人外の私達が幸せになれると思うのか!」

「じゃあ幸せってなんだ?

人は些細な事でも、心に暖かみを感じた時、幸せを実感出来るのだろ!」

「だとしても!……その幸せは直ぐに無くなる。……それは本当に人並みの幸せか?」

「っ!……」

「……………それに私は人を殺し過ぎた。
……………幸せになる権利は無い。」

「……………権利は誰にもある。お前は権利取ろうとしないだけだ!」

「ならどうしろと!?!」

私にはどうしたら良いかわからない……………」

「くっ!……………」

沈黙が生まれた。

それはそうだろう。

アイツ自身、幸せを掴んでいないのだから。

「……………てやる。」

少しでも期待した私が愚かだったか……………。

「…幸せにしてやるよ。」

幸せにしてやるよ、かあ。

ん?何て言ったコイツ?

「……………なんだって?」

「だから俺が幸せにしてやるよ!」

「な、な、な、何を言っているんだ貴様は！！
いきなり告白するなんて！？」

「はぁ？告白？違う！！！」

「エヴァを幸せにすると云う俺の夢だ！」

「な、なおさら悪い！」

「どう聞いても告白じゃないか！」

そう言って私は部屋を出ようと、立ち上がり襖に手をかけた。

「おいエヴァ。どこに行くんだ？」

「……外で風を受けてくる。」

「そうか、それは良かった。」

「……なぜだ？」

「俺が幸せにする前に山を降りるのかと思って。」

「だからそれは告白だと何回言えば解る！」

「……しばらくは、山を降りない。」

「ココは、人が近付かないからココで修行をする。」

「ならその間、俺はエヴァを幸せにする。」

「／／／勝手にしろ！／／／」

私は恥ずかしくなり、イキよい良く襖を閉めた。
そして小走りで外に向かった。

……外は満天の星空だった。

星空に目を奪われ自然に空を見上げた。

「……………シャル・N・ダオラか。」

……………奴なら本当に幸せを体験させてくれるのか？

……………不幸の話をしているのに何故告白されるのか？

……………そう言えば竜ってどうなったんだっけ？

……………などなど色々奴に思ったが、一番惹かれたのは……………

「……………あいつの目だな。」

……………そうだ。

あいつの目を見る度に、この不死の螺旋から助けしてくれる様な気がした。

それは、確信とも言える程だった。

私を助けてくれる存在かあ……………。

「……………奴に期待してみるか。」

そう、シャルが私に幸せを味わせてくれる事を信じて……………。

……………しばらく星空を楽しんだ後、屋敷から夕食の匂いがしたので戻る事にした。

喧嘩する程仲が良い？（後書き）

今更なんですが、時代はエヴァが吸血鬼になって百年後、まだ名をあまり知られていない時です。……大体1500年ぐらいですね

破壊は後悔と借金しか残らない。

side シャル

「おいシャル！私と一緒に人形が倒れてなかったか？」

エヴァが、ここに来て3日が経つ、最初はここの生活に戸惑っていたが、今では家事や炊事を手伝ってくれている。

「ああ、落ちてたな。」

うん、落ちてたな。

「今それは、何処にある？」

「……刃物を持ってたし、この年で人形遊びする趣味は無いから物置に入れて置いた。」

「なっ！あいつは、私の従者だぞ！」

「……そうだったのか。」

いや、知ってたよ」

どんな反応するか楽しみだったから隠しといたんだ」

『いい性格してるね君は』

君には負けるよ」

『ふふふ』』

「奴を起こすから案内しろ！」

「ああ、わかった。」

何あの反応？

焦ってるのか、嫌々起こすのか、わからん反応をするね。

まあ、合格点かな？

エヴァを案内する事、屋敷から5分程して小さな倉庫が見えてきた。

「……ここだ。」

「……物置っていうより倉だな。それより鍵をよこせ！」

鍵を使って面白い展開に運べそうに無かったので、素直に渡した。

渡した鍵を使いエヴァは、倉を開けた。

「……で、どこに置いたんだ。」

倉の中は、薄暗く箱や刀、鎧などでごった返していた。

「確かこの辺りに投げたような……」

刃物持ってたから、刀の辺りに入れたんだよね

おっ！みつけた♪

「…………こいつか？」

「ああ、そいつだ。」

俺は、刃物を持った人形をエヴァに渡す。

「……………んで、どうするんだ？」

「魔力を補充しパスを繋ぎ直す。」

「……………そうか、頑張れよ。」

別に契約とかに興味ないから、その場を去ろうとしたら、首根っこを思いつ切り引っ張られた。

「グハア！……………いてえよ！何するんだ！」

超喉イテ〜！

喉が潰れる〜！

「ほざけ！お前はここにいろ！」

「夕食が作れねえ〜よ！」

今日はスミレ汁ですよ！

「……正確には鱗を置いて行け！」

「はあ？」

魚の鱗は取ってあるから、もう無いわ！

「貴様の鱗をチャチャゼロに付けなければ、また魔力切れになるわ！」

何！？鮎の鱗には魔力を保つ効果があるのか！？

『……いいから、早くあげなよ。』

……はい、すみません。

俺は鱗を引きちぎり、エヴァに渡した。

「……これでいいか？」

俺は、夕食を作るぞ。」

「うむ、もう行っていいぞ。」

今度こそ、倉を後にした。

途中で……

「リク・ラク・ラックライラック 契約に従い……」

なぐんで呪文が聞こえるけど、興味無し無し♪

け、決して魔法が使えていいなぐって何か思っていないんだからね！

『……………本心出てるよ？』

ノノは、いいんだよ！

俺ら2人で1人だろ？

さあぐて！ご飯は炊けたかな？

ご飯の炊き加減が気になったので、足早に屋敷に戻った。今晚のメシ

・ご飯

（米が光るぜ！）

・スミレ汁

（スミレうめえ！）

・鮎の塩焼き

（天然物だよ？）

・お新香

（自分で作りました！）

以上を美味しく食べました♪

……………1人で。

エヴァ曰わく

「魔力の補充のついでに、チャチャゼロ弄ってたら朝日が見えた。」

……だ、そうです。

……何だよそれ。

俺の自信作だったのに。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

―チャチャゼロ復活から二日後……

俺は今困ってます。現在進行形で………

え？何がだつて？

それはね………

「しゃる逃ゲルン ज्याネ！竜ノ刺身ニシテヤルヨ！」

……コレだよ。

エヴァの従者のチャチャゼロが、事ある度に俺に切りかかって来やがる。

「……竜の刺身は不味いからやめろ！」

「ケケケケ、しゃるテメエハ、美味シソウダ！」

「やめろつて！」

本当に勘弁してください！

まだ死にたくないです！

『自業自得だね♪あんな所に入れたんだから。』

倉に入れたただけだろ！

………物置、エヴァ曰わく倉は、只今ネズミ達の樂園になっている。

『ケケケケ、ねずみニツカジラレルカ、ときどきシタゼ！

テメエモときどきヲ感ジナ！』

「そんなドキドキはいらん！」

そんな訳でただ今、屋敷の中で格闘中。

机が壊れ、窓が割れ、襖に穴が空き、

屋敷内はボロボロ………

一体誰が直すんだよ！

『君しかないよね♪』

チクシヨー！

『でもいい加減、吸血鬼様が帰ってくるよ？』

そ、そうだな！

俺はチャチャゼロに向き合った。

「…………お前を止める。」

「オ！ヤットバル気二ナツタカ！」

今の状態で倒す事は出来ても止めるのは難しい…………。壊し、取り押さえれば！

…………結論的に全力で止める事を決断！

…………なんかチャチャゼロにのせられてる気がするけど。

俺は『魔力』と『気』を融合させ、『竜装』状態に変化させ……………
……………ってあれ？

少し『気』が多いような…………。

「キシヤアアアオ！」

案の定、『竜装』のバランスが崩れ、竜になった。

「……本当二竜二ナリヤガッタ！面白イゼ！」

「グルル……」

やめてください！
すぐ戻りますから！

「ケケケケ、威嚇シテルノカ？イイゼイイゼ♪」

「シャアアア！」

違います！
やめてください！

『……もう無駄だと思うよ？それに竜になってすぐには、戻れないでしょ？』

チクシヨー！
やってやるさ！

そして人形と竜が激突したのだ！

………屋敷の中で。

side エヴァ

たつく！なんで私が山菜を取りに行かなければならないのだ！

最近シャルの奴、私を召し使いと誤解してないか？

それでも『不死の魔法使い』と名を馳せて来ていると言つのに………。

今度そこら辺をしつかりさせなければ！

森を抜け、屋敷がある広場へと向かった。

「おいシャル！話があるのだが！………つてなんだこれは！？」

私の目の前には、半壊した屋敷と手足が破壊され動けなくなったチャチャゼロ、そして………鋼の様な鱗をした一匹の銀竜がいたのだ。

私は、チャチャゼロを抱きかかえた。

「チャチャゼロ大丈夫か!？」

損傷は激しいが、あまりのパーツで修復は可能だな。

「ケケケケ、想像以上だな。……しゃるテムエハツエヨ」

「キシヤアアアオ!」

銀竜が吠える。

……… 待て。シャルだと？

……… なる程な、そう言うことか。

「……シャル話しがある。

私のあり方もそうだが、その姿に対しても話して貰おうか?」

「……シャオ。」

ふん! 弱々しく吠えよって!

飴とムチと天ぶら（前書き）

もう少しで麻帆良だ・・・・・・・・

飴とムチと天ぶら

俺は今、正座をしています。

……理由？

前の話から察してくれ。

「……なる程。貴様は3つのタイプになれる。
『人型』『竜型』そして『獣人型』。

襲ってきたチャチャゼロに対し『獣人型』の『竜装』で迎え討とうとしたが、『魔力』と『気』のバランスが崩れ『竜型』になってしまい、仕方がなく竜で迎え討ったが、力が強く屋敷まで半壊させたと……。」

「……そうだ。」

「……なにか言う事は？」

「……すまなかった。」

いや、チャチャゼロにも原因はあるんだよ？

俺は止めたんだよ？

「……何か言いたい事でもあるのか？」

「いや、俺が悪かった。」

……言いたい事が言える人になりたいよ。

その後、エヴァによる説教を2時間程貰い、何とか許してもらえた。

今日の報告。

チャチャゼロとの戦闘。

30分

エヴァの説教。

2時間

屋敷の修復。

10時間

エヴァ作山菜の天ぷら。

やべ〜。

涙が出る程つまいよ。

……天ぷらによって俺の疲れが無くなった感じがする。

ビバ！天ぷら！

∞
∞
∞
∞
∞
∞
∞
∞

「殺シアオウゼ！」とか

「三枚二オロシテヤル」

とか

「りべんじダ！」

とか言われて毎回、ボコされる俺の身にもなってみろ！

『……本気出せば、君は余裕でしょ？』

……チャチャゼ口壊すとエヴァが怒るんだもん！

『……根性無し。』

聞こえない聴こえない♪

さあ〜て！エヴァに朝食を持っていこ♪

既に日課になったエヴァに朝食渡しに行く作業。

この時は、エヴァの顔が見れるから嬉しいんだよな♪

地下へ続く階段を降り、地下室の扉の前についた。

「朝食を持ってきたぞ。」

今日は焼き魚定食です♪

前に地下室の中に入った時は凄く怒られたから、毎回扉の前でエヴァが取りに来るのを待つ。

「オーイ！エヴァ！開けろって！」

…まだ寝てるのかな？

それなら……………

「ロリ吸血鬼〜ロリ婆〜年増〜ゴスロリ年増吸血鬼〜？」

返答がない様だ。

「……………」

なに！この悪口のオンパレードを聞いても起きないとは！？

もしや！？

「……………エヴァ入るぞ！」

怒られるのを覚悟で地下室の扉を開けた。

そして目の前には……………地に倒れたエヴァの姿！

俺は急いで駆け寄る。

「おいエヴァ！大丈夫か！？」

「……ああ、シャルか。」

「大丈夫なのか？」

目の下に隈が出来てるぞ？

「……出来たぞ………ついに出来たぞ……！」

俺の腕を振り払い、両手をあげ、絶叫しているエヴァ。

その仕草が可愛い！

「………取り敢えず落ち着け。」

「落ち着いていられるか！ついに出来たのだ！」

……俺の子が？

『………痛いよ君』

………ごめん。

「一体なにが出来たんだ？」

「うむ！『闇の魔法』の基礎理論が出来上がったのだ！」

「…………へ？」

「『闇の魔法』の基礎理論が出来上がったのだ！」

「一回言わなくても分かるって。」

はあゝマギア・エレベアねえ……………。

そう言えばエヴァが作った技法なんだっけ？

ネギしか使って無かったから忘れてたわ」

『…………マギア・エレベアってなにさ？』

えゝと確か、闇の膨大な魔力を前提とした技法で…………… あゝあれだ！

つまり、吸収して強くなるって奴だ！

『上手く解らなかったけど、要するに強くなる為の技だね？』

そう捕らえて良し！

『でもなんで、君は今出来た技法を知っているんだい？』

えっ！話してなかったっけ？

俺は、前世で『この世界の物語』を本にしてある物を読んだ時があるんだよ。

『ふうん、凄いな』

だろ」

『ここまで脳が腐る物なんだ』

ひどい！信じてね！

『どうしてもいいけど、速くあの子を止めなくちゃ！』

もういいもん！

ノノの馬鹿！

「エヴァ取り敢えず居間に行こう。地下室だと気分が悪くなる。」

「おお！そうだな」

はしゃぐエヴァを引っ張りながら、居間まで連れて行き、茶菓子とお茶を出した。

「はあ、後は試行錯誤しながら『闇の魔法』を形にして行くだけだ」

「ああ、そうか頑張れよ。」

お茶つまいな」

「他人事ではないぞシャル！？ 貴様には『闇の魔法』の練習相手になって貰う！」

「わかった、協力しよう。」

お茶には煎餅だな♪

「ハハハ！嫌だとは言わせんぞ！……………今何
つていった？」

「だから協力するよ。」

今度は饅頭も作る♪

「……………何か簡単に協力するんだな？ 行っておくが、危険な技なのぞ？」

「危険も何も、術者が一番危険だし……………俺はエヴァを
信じてる。」

最初から信じてます。
裏切らねーよ？絶対。

「そ、そうか。なら良いのだが／＼／」

「照れるなつて。……………修行は明日からやるのか？」

「照れておらん！……………修行は明後日からだ、色々と準備するから
な。」

「OK」なら今日の夕飯は豪華にするか！」
食材全て使い切りましょう！

「うむ！楽しみにしているぞ！」

そんな訳で、今夜は『闇の魔法』完成？祝賀会を行った。

冬に備えて貯めていた食材を全て使い、竜人族秘伝の酒『竜の涙』も出した！

ハハハ！どうだ！この豪勢ぷりは！

……………冬どつやって過ぐそう。

『自業自得だね』

もういいや！楽しんで、エヴァに協力しようぜ！

『……………そうだね』頑張ろう』

騒げ騒げ！宴会だ！

そして賑やかなまま、この夜は過ぎていった。

∞
∞
∞
∞
∞
∞
∞
∞
∞
∞

しかし、エヴァの手伝いをする事は無かった。

何故ならあの男が帰ってきたからだ。

飴とムチと天ぶら（後書き）

前の話が長くなってしまったので、この話にも入ってしまいました。
作者が無能な為、すいません。

気付いても殺されるだけ？…………やり直しはありますか？

side 男（隊長）

皆さん覚えていますか？

そうです。

私は二話に出て来た男です。

なんと男から隊長にrank upしました！

えっ？

復讐するのは15年後なんじゃねえの？だつて？

……………そんなに修行出来るかつての！

世の中、質より量なんだよ！

俺は、この一年と半年、仲間や同志さらには召還師を可能な限り集めた。

みんな『銀竜人』に怨みを持っている人間だ。

この大群と言う数の暴力でテメエの命の根を刈り取ってやる！

「行くぞテメエ等！」

「「「オォー！！！！」」」

さあゝ待つてろよ！
銀竜人！！！！

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

side シャル

「おえゝうげゝ。」

『だから程々にしろって言ったのに！』

ども、俺です。

只今二日酔いで、ゲロンパしております。

昨日の祝賀会（宴会）は、まさにカオス！この世の地獄！

酒に強くない俺は、

チャチャゼロに捕まり朝まで飲んでました。

……………チャチャゼロが閻魔様に見えましたよ。

潰れた俺は昼までダウン、やっと立ち直って来た所です。

『本当に大丈夫かい？』

明日からは、あの子の手伝いをするんでしょ？』

大丈夫！エヴァの事になると元気百倍！

一緒に幸せを築こう！

『はあゝ君って言う奴は……。』

！……この感じは！？』

どうしたノノ？

腹でも減ったか？

『……百、いや千を越す悪魔や魔物がコッチに来てるよ！』

はあゝ？

寝ぼけてるの？

『……西南に約10キロの辺りに。

2つ向こうの山からだね！』

……本当に大丈夫？

良い医者紹介しようか？

『ふざけるな！君も僕が言った方向に神経を集中してみて！』

お、おう！

俺は、目を閉じノノが言う方向に神経を集中してみた。

……あれ？なんだ？

……光球の数が尋常じゃないな。

あの光球ってなんだろう？

『……光球は見たかい？その光球は………悪魔と魔物だ。』

な、なんですと！？

『僕達、竜人は魔力を感じる事が出来るんだ！
あの速さだと………あと30分程でコッチに来るよ！』

っ！………勝算は？

『………3人共、やられるね。』

！………ノノ。

『なんだい？』

……エヴァは友達か？

『……たぶん対等な関係……友達以上だと思つ。』

……俺もそう思う。

……強制転移魔法符は何枚ある？

『っ！………2人分はあるよ。』

………そうか。

『………あの子、きっと怒るよ？』

大丈夫だつて！

………生きていれば謝るチャンスは沢山あるよ♪

『………生き残ろうね。』

………死ぬ気はないさ。
さうて！準備するか！

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

side エヴァ

「…………ア…………きろ！」

誰かが起こしているな。

誰と言ってもシャルしかないか…………

「…………ヴァ…………きろ」

うるさい…………

私は今、二日酔いなんだ！

「エヴァ！起きろ！」

「…………怒鳴るな！う！…………頭痛い。」

「それは悪かったな。でも呑気な事を言っている隙はないんだ！」

「……………どうした？」

シャルが、こんなに慌てるなんて…………

「…………ハンター達が、悪魔や魔物を大勢連れて、俺を狩りに来た。」

「そうか……………」

ハンターが攻め込んで来たか…………

ハンターが…………

ハンターが……

ハンターが……

「なんだと！！！」

私は、やっと正気に戻った！

「そんな大声だすな。………敵は、もうそこまで来ている。」

「………どうするんだ？」

大群対3人か………

厳しいぞ………

「………迎え撃つ。」

「………なんか策はあるのか？」

「エヴァにコレをつけて貰う。」

そう言ってシャルは、指輪を出した。

「……コレは？」

……魔導具か？

「『竜の指輪』……コレに使われた鱗を持つ者と仮契約が出来る、竜人と仮契約するには必須な物だ。……使われた鱗は俺の物だ。」

……なるほどな。

「仮契約による、戦力の増加か……」

「いきなりで悪いが良いか？」

「ふん！緊急時なんだろ！竜人式なのが気に食わないが良いだろう！」

……貴様と契約するのが嫌な訳無いだろう。

まったく……

自分に素直ではないな私は……

「そうか……。なら準備するから、その場から動かず目を瞑ってくれ。」

言われた通り、目を瞑った。

……ちよつと待てよ？

竜人式で仮契約すると言う事は、私が従者？

！！！！

そんなの認めん！

「オイ！シャル！このままだと私が従者になってしまうぞ！」

シャルに文句を言う為、魔法陣から出ようとしたが………出れなかった。

しかも、どう見てもコレは、契約の魔法陣ではなく転移魔法陣だ！

「どういう事だ！なぜ転移魔法陣なのだ！」

「悪いなエヴァ。………強制転移符でチャチャゼロと一緒に300キロ先の村へ逃げて貰う。」

「な、貴様はどうする！？」

「エヴァ達が完全に逃げきれる様に、足止めする。」

「貴様舐めているのか！？
お前1人だと死ぬぞ！？」

「死なないさ。……………夢を叶える為。」

魔法陣が発動する。

「クソ！発動を止める！

私はまだ……………貴様に幸せにして貰ってないぞ！」

転移魔法府が10枚。

クソ！強力な魔法陣を作りよって！

「言っただろ？夢を叶える為に死なないさ。……………必ずお前を見つけて出して幸せにするよ。」

「シャル！契約はどうするのだ！せめて貴様にアーティファクトを！」

「…………『竜の指輪』には契約の能力は無い。」

「なっ！？」

「…………別能力はあるがな。……………エヴァ、時間だ。」

「止める！……………止めてくれ。」

「……………エヴァ、もし再会したらお前の牙として契約をしてくれるか？」

「……ああ、してやるさ。……だから止めてくれ。」

「……………ありがとう。」

……………そして私達は転移された。

コレから死闘しに行くと言うのに、笑顔で『ありがとう』と言い……
涙を流していた。

……………必ずだぞ。

必ず私を見つけるのだぞ！

転移が完了され、私達は小さな村に着いた。

「オ、オオ？寝ボケタカ？……御主人ココハ何処ダ？」

「黙れチャチャゼロ！……………行くぞ！」

ふん！貴様が見つけ易い様に名でも売っておくか。

こうして吸血鬼と人形は逆鱗山を後にした。

殺すのは良くないよ？赤松作品だよ？（前書き）

すみません。インフルエンザにかかってしまいまして更新遅れました。

なるべく一週間に以内に1話更新したいと思います。

殺すのは良くないよ？赤松作品だよ？

Side シャル

『……………行っちゃったね。』

……………ああ。

『泣く程、悲しかったんなら他の方法を考えれば良かったのに……………。』

泣く？

ああ、違うよ。

転移の瞬間にホコリが目に入ってたんだよ。

『……………素直じゃないな』

……………本当だよ？

『そう言う事にしてあげる。』

……………もついいや。

……………エヴァ達が逃げる為には、どのくらい時間稼ぎをすればいい？

『……………1時間だね。』

了解！boss！

俺は自身に気合いを入れ、屋敷を出た。

空は……………暗かった。

おゝいノノ？

今何時だっけ？

『午後3時だよ。』

どんだけ召還したんだよ！

そうそれは、悪魔や魔物が空一面に群れていた。

……………2対空一面。

『……………逃げたくなっただ？』

まさか！

俺の男気見せてやるよ！

「いくぜ！……！」

俺は数の暴力に飛び込んでいった。

………ある策を持つて。

約束の1時間が経とうとしていた。

空一面に群れていた悪魔や魔物も今では半分ぐらいまで減った。

「舐めるな！」

しかし数の暴力は変わらない。

10体が向かって来るが、気を纏った爪でなぎ払い、10体全てを送り還す。

「……数ばかりいたって！」

さらに、追撃に来た者をブレスで吹き飛ばす。

周りを巻き込む、50体程の悪魔が還る。

しかし、ブレスの隙について反撃して来た魔物のパンチを食らい魔物の群れの中に飛ばされる。

「ハハハ、ソレソレ！」

「ホホ、もっと楽しませろ♪」

悪魔共目！遊びやがって！

「キシヤアアオ！」

たこ殴りされ、群れから抜け出せないと判断し、竜になって『風の守り』を発動させた。

悪魔共は、俺から発生させる暴風に吹き飛ばされるが、一時的な物だ。

すぐに『風の守り』が解けて、また魔物達が襲ってくる！

……オイ！ノノ！

そろそろ来るんじゃないの！？

『そうだね。戦闘を始めて1時間になる。そろそろお久しぶり、銀竜人。』……来たね！』

森の中から、一人の男が出てきた。

……忘れるハズがない！
昔村を襲撃してきた男だ！

ノノ！奴が主犯か！？

『だぶんね！……体力がヤバいから一撃でね！』

オーケー！

……俺達の策。

リーダー格を倒せば、混乱が起きる、その内に最大級のプレスで敵をなぎ払い、この場から離脱すると言うもの。安易だが、それしか策が浮かばなかった。

行くぜ！！！！

「君には私のプライドを傷つけた」「キシヤアアオ！」　なに！
？」

不意打ち上等！

『竜装』を纏い、森事ブレスで吹き飛ばした。

テレッテー！！！！

吹き飛ばした木々の中にリーダー格の男を発見！

まだ終わらないぜ！

ラカンの『エターナルネギファイバー！』を元に、半年の月日をかけ完成させた技喰らうがいい！

「シャドウウイング！」

竜の形をした気弾^{ビーム}が男を貫く！

「……やったか？」

この技難しいんだよ！

『竜装』の気と混ざらない様にするのが！！！！

だから立つんじゃねえ！

ブレスの効果で上がった砂煙が止んだ。

視界がクリアになり、目の前には吹き飛ばされた木々と俺の技を喰

らい倒れた男がを発見できた。

「やったか！」

『今の内にブレスのチャージを！』

わかつとる！

俺は回路となる悪魔共がもつとも少ない所へブレスを吐くハズだった…

「おや？私がやられてますね？」

奴の声が聴こえるまでは……

男が倒れている森と反対側の森から倒れている男と瓜二つの男が現れた。

「……………どういう事だ！？」

What!?

双子か！？

『しまった！やられた！』

「分身にはそれなりの魔力を入れたつもり何ですが……」

「……そう言う事が。」

確認の為、倒れた男を見たが、男は水に返って消えた。

罨かよ！？

ならプレスで今度こそ本体を消してやる！

口を大きく開け、奴にプレスを吐きつけようとするが……

「「「魔法の射手戒めの風矢！」「」」」

4人の束縛魔法により、身を拘束されてしまった。

「クソっ！」

おいコラ！

召喚獣＋罨＋伏兵ってどんなコンボだよ！

つか今の俺って痺れ罨コンボ状態！？

俺ってラー○ヤン！？

ラージ○ンなのか！？

古龍は罨効かないぞ！？

「……随分姑息な事をするな。」

「策……って言うてほしいな。最強種を狩るのは大変なんでね♪」

「……面倒なもんだな、最強種は。」

「ふふふ、さて最強種である君は、私を含め5人の攻撃をどの位防げるかな？」

「！-！」

「じゃあいくよ♪」ちよつと待つて！

特撮ヒーローじゃないんだから、5人でのフルボッコはやめてよ！

……しかし俺の心の叫びは、虚しく攻撃が始まった。

「魔法の射手連弾・氷22矢！」

「魔法の射手連弾・雷25矢！」

「魔法の射手連弾・火21矢！」

「魔法の射手連弾・風23矢！」

「魔法の射手連弾・光24矢！」

ちよつと待てええ!!!

来るんじゃねえええ！

「グアア！」

俺に降り注ぐ115の矢、それが一斉に直撃する。

冗談にならないぞ！

トラックに引かれた方がマシだ！

クソ！意識が保てない！

ここで終わるのかよ……

エヴァとの約束があるのに……

クソ！クソ！クソ……………

ごめんなエヴァ…………

目が霞んでいき、俺の意識は途切れた。

『…………君は死なない。後は任せてよ。』

生きているなら神様さえ殺してみせる。(前書き)

インフルやべ〜。すっごい頭がいたい。

生きているなら神様さえ殺してみせる。

Side 男（隊長）

「グアア！」

一匹の銀竜は、一言鳴きそして倒れた。

「隊長！完全にしとめたでやんす！」

「あれほどの攻撃を喰らったんだ、動ける方が可笑しい。」

「竜の鱗は高く売れるから嬉しいぞね♪」

「ぐへへ、金は山分けた！」

色々と述べている我が親衛達。

……我ながら癖のある奴が集まったな。

「油断するなよ、奴は最強種だ！何が起こるか判らないぞ！」

「隊長その言葉はおかしいぞ？我らは一応高位な魔法使いだ。射手だつて相当の威力がある。」

「まあ一応用心の為悪魔達は残しとくぞね♪」

「そうしてくれ。」

……しかし落ち着かないな。

奴と初めて会った時感じた『死』のイメージを今回は感じなかった。

……本気で戦っていないのか？

いや、考え過ぎだな。

奴は、本気だった。

命を狙われているんだ、本気をだ　「ぐへへ、剥ぎ取り一番乗り」

」……アイツは一度シメた方が良いな。

「おい！勝手にはぎ取るな！」

銀竜を剥ぎ取りにかかる男に注意するが……聞きそくに無いだろう。

「ぐへへ、良い鱗だ」

ヨダレが出てきそう、ダ！」

……異変が起きた。

剥ぎ取りにかかった男の腹に腕が貫通している！

「ぐへへ、なんだこれ？」

「これは、僕の腕だよ？」腕を引き抜かれ、男は……………死んだ。

「…………シャルは、嫌がるから使いたく無かったけど生きる為だもんね。」

…………はは。

ははは！これだよ！

この『死』を感じさせてくれる感覚！

やっと本気になったな！

「オイ！警戒を怠るな！コレから奴は一味違っぞ！」

私は仲間に指示を飛ばす！

「粹がるのは良いけど……………指示出すのが遅いよ？」

「何！」

俺は残りの仲間を見た！

ぞね男とでやんす男は無事。

ならもう一人は！？

「…………隊長、私の腕があ！？」

……遅かった。

もう一人は、両腕を引き千切られ、立ちすくんでいた。

「……残り3人だね」

そう言う奴は、悪魔が持っていたと思われる剣を二本拾いあげた。

「どっちが良いかなあ？……うん！こっちにしよう」

剣を選んでたらしく、残念ながら選ばれたなっ た剣は………

「ぎゃあ！」

………でやんす男の頭に直撃した。

「ああ、ごめんね」手が滑っちゃったよ」

ふざけるな！

滑るだけで、俺たちが察知出来ない程のスピードが出るか！

「………何ぞね！何ぞね！ありえない！奴は何者ぞね！？」

ちっ！混乱しやがって！

「オイ！召喚した悪魔達で奴に引導を渡せ！」

「わ、わかったぞね！」

そつだ！まだ俺達には大量の悪魔達がいる！

「悪魔達よ！行くぞね！」

「ガッテンダ！」

「ニヨホホ♪モット楽シマセロ！」

100に及ぶ悪魔達が突撃をする！

ふふ、今度こそチェックメイトだ！

「うわゝ沢山くる……………久しぶりで出来るかな？」

『竜演舞』。』

奴は100の大群に舞を演じ始めた。

避けて切る、切って避ける。

その動作がまるで、踊っているようだ。

……踊りに気が行っていたのか、あつと言つ間に100の大群が片付けられてしまった。

「うん♪体は覚えてる様だね♪シャルにも教えよ♪」

くっそ！余裕出しやがって！

「オイ！全ての悪魔で奴を仕留めろ！」

「それが悪魔達が言う事を聞かないぞね！」

「何！」

召喚師の命令は絶対のハズ！

「召喚師ヨ！俺達八倒サレテモ還ルハズ！……ナノニ死ヌトハドウイウ事ダ！」

「何！？」

倒された悪魔達を見る。

首や胴を斬られ倒された悪魔達が還らず死んでいた。

「どついう事ぞね！召喚された者はこの世では死なないハズぞね！」

「生きる者には死を。……命取りに来るんだから、コッチも取らせて貰ったよ♪しかし、まだいるね……召喚

師を倒せば消えるなか？」

「ぞね！？」

ぞね男と竜人の目が会う、そして竜人は動いた。

「く、来るなぞね！」

悪魔を盾にするが、殺され足止めにならない。

「く、くそー！魔法の射手連弾・風22矢！」

奴に22の矢が向かうが、奴は剣で矢を消していった！！！！

「ぞね！？」

そして胸を突かれ、ぞね男は朽ち果てた。

「……………結構時間がかかったね。後は、君1人だ。」

「私としては、どうやって魔法を消したか聞きたいね？」

普通は、剣が折れるだろ！

「生きる者には必ず『死』がある。……………僕はそれを切っただけさ。」

「……………簡単に言ってくれるね。」

最強種は、『死』も見えるのかよ！

「悪魔も消え、仲間を死んだ。後は君を殺すだけだ。」

「……私は死なないよ？ 残念だが、君の相手は、また今度して貰うよ。」

「……逃がすとしても？」

「逃げるとも！」

負けセリフを言って速攻、瞬動を行った。

一瞬にして、奴から離れていく。

そして竜人の村から一キロ程まで離れた。

「……まったく、銀竜人がココまで力を付けていたとは。」

予想外だ。

『死』が見えるなんてな……

最強種は、侮れないな。

……まあいい。

逃げきれたんだ。

また今度、奴に挑もう。

もちろん、大群を連れて！

「ハハハ！待っているよ！銀竜人！」

再戦を胸に決め、この場を離れようとした時、激しい破壊音が聞こえてきた。

「なんだ、この音は？コツチに向かって来るような……ガハア！」

飛んできた物が腹に刺さり、そのまま木に張り付けられてしまった。

「ぐうう……こ、これは！？」

奴が選んだ悪魔の剣！？

馬鹿な！1キロも離れた場所から人を射抜くだと！？

「ガハア！」

口から血がでる。

ハハハ、ココまでか……

「……………楽しかったなあ〜銀竜人？楽しかったなあ〜。
……………」

……………ハハハハハアハハハハハハハハハ〜！

待ってるぞ！先に行つて待ってるぞ！

ハハハハ、ハ、ハ……………」

銀竜人を求め、挑んだ者の一生が閉じた。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

「……………死んだか。」

竜人の村に1人、ノノは呟いた。

「僕の『千里眼』からは逃げれないよ。」

ノノは『直視の魔眼』の他に『千里眼』を持っていた。

「さてと、あの子達を探さなきゃ♪『竜の指輪』を付けてるから大
体の……………あれ？」

ノノは違和感を感じ、指先を見た。

……指先からサビ始めて来ていた。

「……『力』を使い過ぎた代償かな？あの子達と会うのが、遅くなっちゃうな。」

サビ化はどんどん進み、手は完全にサビた。

「……せめて人が近付かない様に……」

ノノは竜に戻った。

そして……

「キシヤアアアア！」

力一杯吠えた。

山びこが、加わり更に激しいハウコウが響く。

……しかし、10分後には鳴き声は聞こえなくなってしまった。

山下の村人達は、この叫びを聞いてから誰一人山に登ろうとはしなかった……

……そして500年の月日は流れた。

生きているなら神様さえ殺してみせる。(後書き)

次回やつと麻帆良へ！

go! 麻帆良へgo! (前書き)

速く仕上げたので、間違いがあるかもしれません。ありましたら、教えてください。よろしく願いします。

go! 麻帆良へgo!

500年の間、色々な事が起きた。

エヴァが『闇の福音』や『人形使い』など言われ有名になったり、オスティアで大戦が起きたり、大規模な竜人狩りも起こった。

竜人狩りのせいで、多くの竜人は殺され、理性を無くし野生の竜となるものや、『竜人狩禁止条約』が締結されてからは、人として皆と暮らして行く道を選んだ者もいる。

また一握りの竜は力を認められ守護聖獣として古龍として力を貸している。

……500年、500年の月日が流れ、やっと物語が始まる。

麻帆良 side エヴァ

「……ター、………ださい。………です。」

………うるさい。

私が寝ているのだ、起こすな。

「マスター、起きてください。時間です。」

……。

「マスター。」

……。

「マスター？」

……。

「……………」

……。

「マスターマスターマスターマスターマスターマスターマスター
スター「ええい！今起きるわ！」……おはようございます、マスタ
ー。」

「まったく！今の起こし方は、奴に似ていた。」

……………少しイラついた。」

「ケケケケ、しゃる力！懐カシイナ！」

「茶々丸！あの人形を物置に放り込んどけ！」

「了解しました。……………マスター、『しゃる』とは誰ですか？」

「ふん！人を幸せにするといいながら死んだ愚かな奴の名だ。」

……………そうだ。

500年前に出会った最強種・銀竜人。

力を付け、名が有名になって『余裕』が出来始めた頃、奴を探してみたが山にはいなかった。

竜人狩りをしている組織に片っ端聞いてみたが、何一つ情報があがらない。

……………腹いせに組織を潰していったけな？

それが原因で『竜人狩禁止条約』が出来たっけ？

「……………マスター不機嫌？」

「……………私はいつも上機嫌だぞ。それより、今日の予定は！」

「はい。学校が終わりましたら、午前零時から学園の警備があります。」

「……………全く厄介な呪いだ。」

「マスター、そろそろ時間が……………」

「おお、そうか。行くぞ茶々丸。」

「はい、マスター。」

……最近、タカミチの奴がつるさいからな。

急ぐか。

600万ドルの賞金首は、いつも通り学校生活を過ごしていた。

魔法先生は、まだ来ないが銀竜人は……………。

∞
∞
∞
∞
∞
∞
∞
∞

魔法世界某博物館

午後10時

s i d e シャル

……………

……

……

……

…

ん？体が硬い？

んゝ何かの中に入ってる？

出れるかな？

おっ！なんかいけそう♪

んゝとおゝうりゃゝ！

「ぶはあ！」

出れた！

外の空気うめゝ！

……あれ？

「ここは、どこだ？」

周りを見渡せば、剣やら巻物やら服などが展示されていた。

……博物館？

『正解♪やっと起きたね♪』

おお！ノノか！

俺の心からの相棒が話しかけてきた。

早速だけど、説明プリーズ。

『どっから？』

俺が意識を失ってから！

『……あの後、君はやられ、意識を無くしたから代わりにハンター達を殺った。』

……ノノが？

『うん。』

……殺った？

『……うん。』

……

『……………』

…………… 今回だけだからな。

『…………… 了解♪』

んでその後は？

『力の使い過ぎで、体がサビて来て完全にサビたら、冬眠に入った。今思うとコレは脱皮みたいな者だったんだね♪』

…………… 蛇かよ!？

『君の抜け殻があるよ? …… 竜の抜け殻ってレアだね♪』

…………… レアだけどキシヨイな。

つーか冬眠って言ってたけど、どの位寝てた？

『500年♪』

…………… 一歩間違えてたら死んでたな。

『んで冬眠中に人間が来て僕達を博物館に展示した。

おしまい♪』

色々はしってたが、なんかム力つくな！

展示されるのって！

『腹いせに展示品持って行っちゃえ♪』

もとは僕達のだし♪』

そうだな！

服ボロボロだし、あれ貰お♪

『あつ！あの刀も持っていて♪』

了解♪

うはっ♪取り放題って楽しい♪

結局、展示品の半分近くを奪い天井に穴を空け、博物館を後にした。

余談ではあるが、警報音を聞き駆けつけた警備員全てが、気絶し犯人の顔を見れなかった。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

魔法世界上空

『さて、これからどうする？』

勿論エヴァ達に会いに行くぞ！

『言うと思った』』

そして、エヴァ達がどこにいるのかわからない！

助けて！ノノ！

『…………言うと思った。』

あの子に『竜の指輪』を持たせたよね？

今も持っているならすぐに行けるよ』』

なに！？

『あれは、竜の魔力が秘められるから感じる事は出来るよね？』

うん。

おっ』発見』

つかこの世界にいないだろ？

『そうだね、でも関係無いよ。あれは、場所を知らせる効果と使われた鱗の竜を召喚できる効果があるんだよ』』

なんと！？

婚約指輪のつもりが、瞬間移動装置だったとは！？

でも召喚ってあっちが、呼ばなきゃ行けないんじゃない？

『……………大丈夫だって！気合で何とかなるって！』

何だよそれ！

『さあ！強く祈って！』

えっ！？その案でいくの！？

うゝんでも、ラカンも気合一発で理論上 絶対脱出不可能な閉鎖空間抜け出しているからなあゝ。

でも俺ってバグキャラじゃないしなあゝ？

『人格が2つあって、最強種で、『死』が見えるって十分バグキャラだよ？』

なんと！？

俺はバグキャラなのか！

なんかいけそうな気がするぜ！

『そうだ！君はバグキャラだ！』

おうとも！俺はバグキャラだ！

いくぜ！！！！

「ぬんっ！ぬぐぐぐぐー！ぐうおおお！ぬうぐおおおおおおお

ッ！

っあー！」

テキトーに気合を入れ叫んだら俺の足元に魔法陣が展開され、俺は召喚された。

召喚される際に放たれる光に目が眩むが、すぐに慣れ辺りを見渡した。

そこには、30体程の鬼と顔を赤く染め、服が所々破けて息があがったマイハニーがいた。

……………エッチなのはいけないと思います。

て言うかっ♪

俺の嫁に何しとんだワレエ！！！！

「殺す！」

そして、この場に一匹の最強の竜が参戦したのだ。

go! 麻帆良へgo! (後書き)

インフルエンザと台風のコラボは強いですね。

今更だけどタイトルと内容って関係無いですから！（前書き）

内容薄いです。次はシャルが学園でどういうポジションに付くか書いて停電に入りたいと思います。

今更だけどタイトルと内容って関係無いですから！

麻帆良 s i d e エヴァ

午前零時を過ぎた頃、私は上位の鬼達に囲まれていた。

「くそ！ジジイめ、情報が違うではないか！」

何故このような危機に面しているかと言うと……

「エヴァ、今回の侵入者は一人だけじゃぞ。気軽に行くが良い。」

……なんて言うから茶々丸を置いてきてしまった。

確かに一人だったが、侵入者は命を媒介に大量の鬼を召喚したではないか！

「悪いな嬢ちゃん呼ばれたからには手加減できんのか、恨まんといてな。」

「なっ！私は嬢ちゃんという歳ではないわ！」

やかましい奴等メ！

『闇の福音』と呼ばれ恐れられた私を手玉に取りよって！

「そう言うな嬢ちゃん。兎も角………死んでえな。」

「何!？」

鬼達の群れの中から一体の狐女が仕掛けてきた!

奴メ!鬼だけでなく狐女も呼んだのか!

くそ!間に合わない!

不意を突かれ障壁の展開が間に合わない。

満月でもなく、媒介もなく、従者もない、コレは終わったな……………

まあ、不死の身だ。

増援が来るまで粘ってやるか……………

覚悟を決め、狐女に斬りつけられるのを待つが、いつになっても痛みが伝わって来ない。

むしろ……………

「……………無念。」

不思議な力によって、狐女は還っていった。

「……………これは。」

力の発生源を指から感じ見てみれば、シャルから貰った指輪が光輝いていた。

「ふふふ、奴は死してもなお、私の牙であり続けるか……………」。

しかし、光は弱くなつていき効果も消えてきている。

「油断したわ嬢ちゃん。対魔の指輪を付けとったなんて、しかし…

………… もうその手は喰らわへんで！」

指輪の効果が切れるのを待つてから仕掛けようとする鬼達。

………… もう終わりだな。

しかし、もう一度奴に会いたかったな。

ふふふ、我ながら指輪を見ただけで思い出すとは…………

そして指輪の光が止んだ。

「いまや！かかれえ！」

向かってくる鬼達。

「…………… シャルもう一度お前に会いたいよ。」

…………… 異変は起きた。

光が止んだハズの指輪が再度、光始め砕けた。

激しい閃光が起こり、辺りを明るく染める。

視力が回復し、目の前を確認すると……………

死んだと思っていた私の牙が現れ……………

「殺す！」

殺気を振り巻きながら、鬼達に向かっていったのだ。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

麻帆良 s i d e タカミチ

全く、学園長は！

明日は来週に控えた学園都市全体のメンテナンスの打ち合わせがあるというのに……………

「タカミチ！緊急事態じゃ！ワシのミスでエヴァがやられておる、今すぐ行ってほしい！」

兎も角、急ごう。

エヴァが任されている地域までは、この通りを出てすぐそこだ！

僕はスピードをあげ、エヴァがいると報告があつた森へ入った。

「エヴァ！大丈夫かい！

！！！！ ……これは！？」

森入って直ぐに、細切れになった鬼の死体と血まみれの青年とエヴァを確認できた。

「……………貴様は、エヴァに敵対する者か？」

どうするべきか悩んでいると青年からコンタクトを計ってきた。

「ああ、僕はエヴァと同僚のたかみ！！！」

……………青年と目があつた瞬間、片膝を着いてしまった。

止まらない汗、わかる。

青年のは、僕に『死』を与える者だ！

「かはあ……………はあはあ。」

息をするのが苦しい。

何とかポケットに手を入れなくては……

戦闘に入ったら負けるのが目に見えているが、僕にも誇りはある！

歯を食いしばり青年と対峙するが、思わぬ所から助けは来た。

「シャル、奴は私の同僚だ。いい加減殺気立つのは辞めろ。」

「……そうだったか、悪いな。」

襲い掛かってくる『死』への重圧が一気に取れた。

「……助かったよエヴァ。しかしあの青年は何者だい？」

見た目18かな？

「コイツは、私の昔馴染みにして、私の牙だ。」

「牙？ 従者って事かい？」

エヴァに茶々姉妹の他に従者がいたとは！

「まあそんな所だ。取りあえずコイツは侵入者にならない。挨拶代わりにジジイの所へ行くぞ。」

「……随分酷い扱いだな。」

「いきなり現れた、貴様が悪い。」

「それも……そうか。」

どうやら悪い人？では無いようだ。

さて、学園長はどう動くかな？

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

麻帆良学園長室前

side シャル

いやゝゝ

マッスルしたなあゝ

久しぶりに体動かすって気持ちいいゝ

『……君は『死』を与える事を禁じてなかったっけ？』

だってあの状況だよ？

なんかプチって切れたんだよ！

『……気持ちは分かるけど程々にね？』

OK!boss!

そんなくだらない話をしてる中、タカミチが話しかけてきた。

「自己紹介はまだだったね、僕はタカミチ・T・高畑。ここで教師とかやっているよ、タカミチって読んでくれ。」

「シャル・N・ダオラ、最強種銀竜人にしてエヴァの牙だ。」

「最強種とは驚いたな」

……今からこの学園のトップに会って貰うけど良いかい？」

「……エヴァを部下に置く程の器を持つ者だ。楽しみにしてるさ。」

「ちょっと待てシャル！私は部下になってはいないぞ！」

「……どういうことだ？」

いや、知ってるよ」

つーか学園長と会ったの楽しみなんですけど」

『……どんな感じなの？』

……一言で言つと妖怪だ！

『……僕達、悪魔や魔物に殺されかけてるよ？』

だから憂さ晴らしにちよつと『目』を使おうかと♪

『……君の性格は好きだよ♪』

まかしんさい！

楽しませてやるさ！

「……その辺りも学園長に聞けばわかるよ。……着いたね、高畑です。入ります。」

ドアが開かれ、全員が中に入り学園長と対峙した。

「初めまして僕は、この学園の近衛フォー！！！」

そして俺は名前を名乗っているジジイに全力で『死』のイメージを与えた！

ジジイは見事に椅子ごと倒れた！

……倒れるだけか、60点だ。

『少し辛口だね♪』

そうか？

「ちよつとシャル君！何してるんだい！」

「ぶ、くはははは！良いぞシャル！流石は我が牙だ！」

「悪いタカミチ。悪魔や妖怪の類には手加減を知らないのな。」

「学園長は人だよ！学園長！起きて下さい！」

「ふおおおお、川が見えるの〜」

「学園長！」

そんな訳で、ジジイが復活するまで10分の間、俺とエヴァは学園長室に置いてあったお茶を優雅に楽しんでいた。

海賊王に俺はなる？（前書き）

シリウスは苦手です

海賊王に俺はなる？

side シャル

「つまり500年の眠りから覚め、エヴァとの約束の為ここまで来たということじゃな？」

「そうだ。」

ジジイが復活して、ある程度の事情を話し今にあたる。

「うゝむ、まいったのゝ、エヴァの従者だけで危ないのに最強種銀竜人ときたか。」

「学園長、本当に彼は最強種のですか？」

などとタカミチはふざけた質問をしゃがる。

一回シメてやろうか？

「彼の腕を見たらうに……。竜人は力が強い者は力が抑え切れず体に鱗が出てしまう。さらに銀の鱗なんて数少ない竜人でもそうおらん。」

「だからと言って最強種で」「おいタカミチ。」「……………何だいシャル君？」

「そんなに俺が気に食わないなら学園ごと消してやるつか？」

「なっ！！！」

うん、ここは言って置いた方がいいな」

『でも全壊は出来ないよ？』

……………半壊は？

『微妙な所だね』

……………。

「はっ！良いぞシャル！そうなれば私もこの呪いに困る事はない」

おっ、エヴァは賛成だね」

「これエヴァ、煽らないでくれんか？」

「シャルは私の従者になる男だ！主の不徳を見逃すとも？」

「ぬうう……………そんな事はしないよなシャル君？」

「……………お前達次第だ。」

ジジイが可愛く問いたって萌ん！！！！

「困ったの、話によるとシャル君は、まだエヴァと契約しとらん

のじゃな？」

「……ああ」

来て速攻ここに呼ばれたからな！

「どうじゃ！エヴァの従者になるのをやめん」「不問だな。」…
…せめて最後まで言わせてほしんじゃが……」

言わせるか！

主は1人で十分だ！

「うゝむ、ならここで働かないか？」

「……なぜそうなる。」

ちょっと待て！！！！

俺に何させるんだよ！

「エヴァの従者になるのは仕方ないとして、何もしないで、ここに
いるのは、困るんじゃ。」

「私は困らんが？」

エヴァが認めてるんだから良いじゃないか！

「ただでとは言わん。それなりの給料もあげよう。」

「だから俺は働くとはいってな」「シャル君、ちょっといいかい？」
「なんだタカミチ？」

タカミチが手招きして、俺を呼んでいる。

「君に『男』として言いたい事があるんだ。」

「『男』としてか……」

やべー すごい興味ある誘いなんですけど！

俺は、興味心に駆られタカミチの所へいった。

「君はエヴァの所へ居候するんだよね？」

「ああ……。」「

うわ！男に耳元で話されると鳥肌たつな！

「居候の存在で、ニートで彼女の金で生きるって僕はどうかと思うよ？」

「なあ！」

な、なんですとー！

「それは『男』としてどうか？」

「……………」

確かに男ではない！

まるで俺がエヴァの……

『……紐だね』

ギャース！

無理！そんな俺の男道に反する……！

「さらに言つと」「もういい、タカミチ。」……答えは出たようだね。」

「ああ……ジジイ！仕事をやってやるさ！」

「なあ！」

「フオ！そうかそれはよかった！」

「何故だシャル！私がお前を養う程貯えを用意していないと思ってるのか！」

「違う。主には負担をかけたくない俺のプライドだ！………何より紐つてのが嫌だ。」

最後の言葉はみんなには、聴こえない様に言った。

「フオフオ、タカミチ君どうやってシャル君を説得したのじゃ？」

「それは……言えません。しいて言えば『男』について説いただけです。」

「ああ、タカミチには感謝している。危うく道を外す所だった。……学園を潰してもお前は助けてやるさ。」

「……学園は潰して欲しくはないな。」

「フオフオ、ならシャル君は何か出来る物はないかね？」

「……先生だ。」

「「「………はあ？」「」」

エヴァ、タカミチ、ジジイの声がそろつ。

「だから先生だ。出来れば歴史の先生がいい。」

「……本気か？」

ちよつとエヴァさん！

その不安たつぷりの目は何ですか！

『僕も聞きたいけど、本気なの？』

ノノまで……。

……一様、歴史に関しては中学レベルなら完璧だよ？

「エヴァ、俺はお前の従者だ。不可能はない。」

「ふ、ふん！当たり前だ！私の従者が何もできない筈がない！」

「う、うゝむ、ならシャル君には歴史の先生と副担任をして貰おうかな？」

「いいだろう。」

「詳しい事は明日話すから今日の所は帰っていいぞい」

話が一段落したところで、お開きになるようだ！

「学園長、副担任とは『彼』の副担任ですか！？」

「そうじゃが？」

「そうなるとシャルは、私の担任になるな」

タカミチはタカミチで、ジジイと話し出したし、エヴァは1人で納得してるし、俺はアウトロー？

『存在感薄ね』

うるへゝ！

「よし！帰るぞシャル！」

ちよつと待てよ！
展開速いつて！

「……………ああ。」

ちよつと俺！

返事するなって！

ええい！もういい！

最後に一言 言わなければ！

「時にジジイ。」

「なんじゃいシャル君？」

「金の分は働いてやるが……もしエヴァに不徳を加えたり、エヴァと敵対する様であれば……」

「…………お前等を消すからな。」

軽めに殺気を飛ばしながら、ジジイを威嚇する。

「う、うむ。わかったぞ。」

そして俺達は、学園長室を後にした。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

エヴァハウス前

side エヴァ

「くくく、殺気に当てられ青くなるジジイの顔が面白くてならん！」

「そうか、それは良かった。」

ああ、本当に良かった。シャルが、私の従者になれば恐い者などいなくなるわ！

「シャル、お前にも今行っている作戦を手伝って貰うぞ?」

「全てはエヴァが望むがままに、だ。」

うむ！本当にいい従者だな！

坊や相手に、私と茶々丸そしてシャル！

後衛・中衛・前衛バランスの取れたパーティーだ！

本当に良いタイミング来た者だ！

「……時にエヴァ。」

「なんだシャル♪」

私は今 上機嫌だ！
何でも聞いてやるぞ♪

「速い所、契約をしてくれないか?」

「お、おう♪そうであつたな!」

いかんいかん！
スツカリ忘れてたわ。

「私との契約は『血の契約』をして貰うぞ。」

「……俺は魔法は使えないぞ？」

「なぐに簡単な事さ。」

お互いの血を交換した後に私が呪文を唱えれば終わる。」

「そうか、なら速くやってくれ。」

「そう焦るな。まずは貴様の血を吸うぞ。」

そんなに速く私の従者になりたかったのか」

全くせつかちな奴め」

首もとをさらけ出したシャルに私は噛み付き、血を啜った。

月夜が照らす中、私達が行っている契約は神秘的な行動だったであ
ろう。

「うむ、とても美味であったぞ」

初対面は最初が肝心！（前書き）

最初が無能な為、あまり進展してもないし内容薄いです。

ごめんなさい。

次は茶々丸襲撃を書きたいです。

作者の一言でした。

初対面は最初が肝心！

side シャル

スーツって、堅苦しくて嫌いだな。

ネクタイ取って良いかなあ？

つか

「……………何のようだ。」

「朝から殺気を当てないでほしいのう。」

午前6時、俺は学園長室にいる。

エヴァとの契約を終え、いざ寝ようとした時、TELがなり、

「今日の午前6時にスーツを着て来てほしいんじゃが……………」

と、ふざけた事をジジイは言いやがった！

寝みよ！

つか寝てねーよ！

「朝っぱらから呼びつけるのが悪い。」

「ワシも寝ておらんぞ？」

妖怪と一緒にするなっつーの！

「フオフオ、善は急げと言うし今日から働いて貰おうと思っての〜」

「……………速いな。」

速すぎだよ！

もっとエヴァと遊ぶ時間をくれよ！

「仕事は、歴史教師と3・Aの副担任、そして……………
夜の警備をして貰うよ。」

「……………夜の警備？」

「この学園は表でも裏でも有名だからの〜。
生徒を狙う輩を追いついて欲しいんじゃない。」

「……………なるほどな。」

確かにお嬢様や天才や将来有望な子が多いからな〜。

「わかった、引き受けよう。」

「うむ、助かるわい。……………時に、シャル君。」

「……………なんだ。」

「君の体の鱗は、これ以上は消せないのかの？」

「ああ、それか……」

「そうだよね」

腕はスーツで隠れてるけど、手や耳は気付くよね」

「大丈夫！こんな時は『あれ』だよね」

「うおっ！起きたのかノノ？」

「今さっきね」

「そっか」

「じゃあ2人で行くか！」

「ジジイ、それにはコレを使う。」

「そ、それは！」

「そうコレは、『封竜のピアス』！」

「あの子と暮らすなら人になるのは、必然！」

「だから『封竜のピアス』を盗って……頂いて来たものだ！」

「このピアスには、竜の力を抑える能力があるんだよ！」

簡単に言うと、漏れる力をこのピアスが吸い取ってくれる！

今ならペアセットで20万の価格！どうですか！お茶の間の皆さん！

『売らないけどね』』

「う、うゝむ、『封竜のピアス』は貴重なアーティファクトなんじやが……どこから入手したのじゃ？」

「……………あるダンジョンから入手した。」

博物館だけどね♪

「ほお！コレ程の宝が奉られている場所じゃ、危険は多かったのじやな？」

「ああ、手に血がでたな。」

『ガラスを割ったからね♪』

「血がでるとな！？ 最強種と互角に戦う魔物がいたと！？」

「舐めるなジジイ、……………全員倒してやったさ。」

博物館の警備員をな！

『瞬殺だったね♪』

ジジイの質問責めを適当に受け答えしている内に、時間が過ぎていき学生の声がちらほら聞こえてきた。

その時……

「学園長、ネギ君が着きました。」

とタカミチの声が聴こえ、そしてドアが開いた。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

俺は今、困ってます。

え？久しぶりに聞いたって？

だって俺の前には女子中学生と言う名の魑魅魍魎がうじゃうじゃと！

「今日からこのクラスの副担任を務めるシャル先生です♪ シャル先生気軽に自己紹介をお願いします！」

できるかっつーの！

女子校の教室なんて俺みたいな男子には天国みたいな地獄！

ケーキの中にタバスコが入っている様な物だ！

『じゃあ何で先生になったの？』

ネギが出来るなら俺にだって！

………と言っ感じの俺の意地です。

エヴァ助けて！

あつ！こいつ目を逸らしやがった！

しかも笑ってやがる！

くそ〜！見せてやる！
やあ〜てやるぜ！！！！

「先程、ネギ先生から紹介されました。
シャル・N・ダオラだ。
このクラスの副担任と歴史教師を務める事になった。
よろしく頼む。」

YES！YES！YES！

完璧！

p e r f e c t i s b e a u t i f u l !

クールに素っ気なく！

これで、みんなドン引きだな！

このクラスの伝統の黄色い声のビックウェーブを抑えら……

「「「キヤー！格好いい！」「」」

……れなかった。

「外人なのになんで歴史教師なんですか！？」

「若いのに何で先生！？」

「髪の色って地毛！？」

「この豚野郎ー！」

「彼女はいますか？」

くっそー！来たよ！

ウェーブの次に来る質問責め！

ネギ！苦笑いしないで助けるよ！

つか、豚野郎ー！って言われなかった！？

『この豚野郎ー』

黙れノノ！

「みんな待つて待つて」

ここは、代表として私がインタビューさせて貰うよ」

「待つてました！麻帆良突撃リポーター！」

「ヒューヒュー」

……………出たよ

麻帆良のパパラッチ

「まず最初に、先生は名前に外人だけど、なんで歴史教師なんですか？」

「……………一時期、『歴史』についてドツプリハマった時があつて、その影響で教師の資格が取れた。……………こんな感じで返せばいいかなあ？」

「ふむふむ……………次に先生は見た目、18才に見えるけど何で先生をやつてるんですか？」

「……………学園長のワガママだ。」

……………こう答えれば皆が納得するな。

「そりゃゝ災難だったね先生。……………まだまだ質問したいけど最後に！」

……恋人はいますか？」

「!!!!」

やっぱそれ聞く〜!

本当に女子って恋愛の話好きだね〜。

まあ、取りあえず……

「……恋人は、いないが『牙』になると決めた人はいるな。俺はソイツの夢と一緒に叶える為にここに来たとも言える。」

どう?

このカミングアウト?

おっ、エヴァが赤くなってる♪

いや〜言ってるコツチも恥ずかしいんだけど、俺の体にはスキルとして『ポーカーフェイス』が付いてるから顔には出ないぞ♪

「『牙』?ここに来た?…………上手くわからないんだけど先生?」

「子供にはわからないさ。

さて、一段落したし授業を始めるぞ!」

俺はネギみたいに、初授業を終わらす気はないぜ!!!!

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

何だかんだで、受け持つ授業が全て終わり我が家エヴァハウスに帰宅した。

「ただいま。」

「おお、帰ったか。」

「……………疲れた。どのクラスもうるさくて嫌にやるぞ。」

どのクラスも入った瞬間に歓声があがるんだな。

3 - A だけじゃないんだね。

「お疲れ様ですシャルさん。」

「ありがとう茶々丸。」

茶々丸が俺にお茶を差し出してくれた。

茶々丸っていい子だな♪

決めだぞ！ネギの茶々丸フラグを潰してやる！

『フラグって何？』

俺の娘はやらん！って事。

「どうした辛気くさい顔をして？」

「なに、決意が一つ増えただけだ。」

「ふん……しかし随分と危ない自己紹介だったな？ 『牙』と言っただけで3人は反応したぞ？」

「事実を言っただけだ。」

それに……悪い気には、ならなかっただろ？」

「わ、私は、お前が目に付けられ停電の日に動け無くなるのは厳しいと言いたいのだ！……まあ悪い気はしなかったけど。」

「…………ふ。」

見ました皆さん！

ツンデレですよツンデレ♪

やべー今のでメシ3杯はいけるな！

『…………君っていつも幸せそうだね？』

幸せいっぱい♪

夢いっぱい♪

「夕食をお持ちしました。」

「ああ、ありがとう茶々丸。」

「うむ、食べるか。」

この後、宣言通りエヴァを見ながら3杯おかわりしたぜ……！

……腹が痛い。

『無理するからだよ』

初対面は最初が肝心！（後書き）

PVが十万を超えました！読んでくださる皆様に感謝いたします。
今後も皆さんが楽しめる作品を書きたいと思っています。

PVとユニークってなんですか？
今一わかってない作者です。

トレース・オン？（前書き）

携帯変えたので投稿が遅れました。すみません。

トレース・オン？

Side シャル

——『和』

それは日本の心。

洋・中・ファーストフードあるなかで、一番華麗で美しい料理を作り、日本の歴史と共に発展してきた独自の文化。

日本は『和』とでも言えるだろう。

「結構なお手前で…」

「ありがとうございます、シャル先生。」

そんな訳で、俺は茶道部の顧問をしています。

「しかしシャル。お前に茶道の心得があったとはな。」

「なに少しかじっただけだ。」

中学・高校時代に運動オンチだったから帰宅部に……

でも厳しい学校だったから茶道部に入ったんだよね。

『俗に言う運子』』

汚いからその言い方辞めなさい！

「かじっただけであれ程出来るとはな。——ネギ・スプリングフィールドに助言者がついたかも知れん。」

ああ、カモね。

「茶々丸はしばらく私のそばを離れるなよ。」

「……はい、マスター。」

「……俺はどうする？」

「貴様は、この学園で1番と言って良い程の実力者だ。……心配はしてないさ。」

「フフ、たしかにな。」

確かこの時のネギってカスだったな。

「……俺ってそんなに強いのか？」

『全盛期のエヴァと同等。……倒すんじゃなく『殺す』なら魔法世界を含め上位に入る程の強さだよ』

「……何かオリ主最強物だな？」

『……でも弱点も多いよ？』

「何だよ弱点なんか『おーいエヴァ！』」

「……」。

タカミチKY決定。

「……何か用か？」

「よう、タカミチ。」

「やあ、シャル君。……エヴァ、学園長が呼びだ。一人で来いだってさ。」

「——わかった。すぐ行くと伝える。」

「ん？これって茶々丸襲撃イベントじゃね？」

「そんなら『正義の味方』にでもなろうかな」

『面白い事考えてるでしょ？教えて♪』

応！実はな……………

俺は、ノノにコレから起きる事とその対処方法を教えた。

『成る程ね♪相手を倒すなら精神からね♪』

さらに、エヴァと茶々丸の好感度がUPする一石二鳥の案だ！

『でもどっちかと言うと『正義の味方』より『悪の味方』だね♪』

勝った奴が正義なのさ！

それじゃあ『○ミヤ○ロウ作戦』開始します♪

『お〜♪』

「ああ、そつだシャル君。」

…………… 本当にk yだな！

「……………なんだ？」

「学園の中で一部だけど君の事を良く思っていない人達がいるから、暫くは目立った行動はしない方がいいよ？」

「ああ、忠告ありがとうな。」

「はん！ シャルに喧嘩を売るとはな！ 身の程知らずにも程があるわ！」

全です！私は平和主義なんですよ！

「任せるエヴァ。降り懸かる火の粉は、全力で払うさ！」

話し合いでね！

「程ほどにしてくれよ？さて、行こうかエヴァ。」

「ああ、人目のある所を歩くだぞ茶々丸。」

エヴァは、タカミチと歩いて行つた。

「さて、俺もこの後に用事があるから行くが茶々丸は気をつけろよ。」

「はい、シャルさん。」

そして俺達も別に行動し始めた。

よっしやあああ！

作戦開始だ！

やあゝてやるぜ！

作戦を開始して茶々丸の後を付けているのだが……

茶々丸ええ子やなゝ。

風船取ってあげたり、ばあちゃん助けたり、猫を助けたり、餌をあげたり……

やはり茶々丸は、ネギにはやらん！

『娘はやらん』

いや、真似しなくていいから。

『あ！少女が出て来たよ』

……………作戦変更だ。

こんなええ子を倒しに来るガキを痛め付けるぞ！

『……………目は使のかい？』

脅し程度にね』

さうて行くか！

S i d e ネギ

「光の精霊１１柱…集い来たりて……」

でも本当にいいのかな？

僕は先生で茶々丸さんは生徒なのに……

「魔法の射手連弾・光の１１矢！」

「……………！！！」

うう、罪悪感はあるけど次の満月まで時間は、ないし……………

すみません茶々丸さん！

茶々丸に襲い掛かる魔法の矢。

しかし、その矢は茶々丸に届く事はなかった。

「すみませんマスター……………もし 私が動なくなったら猫に餌を……」
「謝るのはエヴァだけか？」 え！？？」

介入者によつて魔法の矢が防がれた為に……

「あ、あなたは！？」

そしてここで魔法先生と竜人は初めて『戦いの場』で出会った。

S i d e 茶々丸

私に襲い掛かる矢は、ある人の介入によつて遮られた。

緑色の髪に、私より身長の少し高い青年。

「大丈夫か？茶々丸。」

そう三日前にマスターが連れてきた昔からの従者……

……シャルさんだ。

「はい、各機能正常に稼働中です。」

「そうか……それは良かった。」

「しかしシャルさんは、大丈夫なんですか？」

「ん？」

彼は私を守るために、自身の翼を出し、それを盾にしたのだ。

「あんなガキの魔法でくたばるかよ。」

「いえ、私が言いたいの……その……正体がばれてしまいましたか？」

案の定、ネギ先生と神楽坂さんは、驚いています。

「え？なんでシャル先生？てか翼はえてる？」

「シャル先生……」

「たつく！良い所だったのに、邪魔しやがって！」

本当に小動物は、潰した方が良いでしょうね。

「……おいネギ。これはどういう事だ。」

「……！」

ネギ先生は、呼ばれて驚いている。

「え、あ、ちや、茶々丸さんは、エヴァンジュリンさんの従者で……倒さないと僕の命が……」

「なる程な、エヴァに勝てないから勝てる見込みを増やそうと言う魂胆か……」

「やいテメエ！何なんだ！いきなり出てきやがって！」

…… 本当につるさいですね、この小動物。

「俺は3 - A組副担任、茶道部顧問にしてエヴァの従者のただの銀竜人さ。」

「『え！！！』」

皆さん驚いてますね。

私も初めて会った時は驚きましたから。

「シャル先生も魔法使いなの！？」

「………… エヴァンジュリンさんの従者」

「ぎ、銀竜人だって！？」

小動物は、気付いたようですね。

「あ、兄貴！ここは引きましょう！」

「え！？」

「銀竜人って言ったら真祖と同じ最強種ですぜ！相手が悪すぎ」小動物は黙ってる！」 は、はい！」

「ネギ、これは学園の総意見なのか？」

「え！？」

「俺は、この学園にいるが、この学園の味方ではない。学園長にも言ったが俺は、エヴァの為にここにいる。これが学園の総意見ならエヴァに不徳が生まれる。よって……この学園を破壊する。」

『破壊』と言う言葉を発した瞬間、シャルさんから得体の知れない力が感知出来た。

これは、『気』？『魔力』？……違う、そんな優しい物ではない。

これは、『殺気』。

純粹に『死』を感じさせられ、シャルさんと目が会っただけで『殺される』と錯覚が起きる。

シャルさんと対峙している二人 + αは……

ネギ先生は、顔を蒼く染め震え……

神楽坂さんは、その場で腰を抜かし……

小動物は……液体？みたいな物を滝の様に流していますね。

しかし、この緊迫した空間は、シャルさんが背を向けた瞬間に終わりを告げた。

「ふん、学園がガキ一人に総意見を任せる筈がないか……。今日の

所は見逃すが、エヴァに挑むなら必ず俺が障害にあることを忘れるな。」

『殺気』から解放去れたネギ先生は、神楽坂さんと同じくその場に腰を着いた。

「茶々丸行くぞ。」

「はい。」

「ま、待って下さい！シャル先「時にネギ先生……」 はい！？」

「襲撃の事は、見逃すが教師が生徒に手を出すとはいかがなものかな？」

「……！！」

「その辺も良く考えるんだな。」

……シャルさん、『心』を攻撃するのが上手い様ですね。

ネギ先生は蒼くなった顔を更に蒼くしていますね。

私は、シャルさんの後につきその場を後にした。

……しかし私にも『心』はあるのでしょうか？

シャルさんに助けられた時に起きた胸の主機関部辺りが熱くなったのは一体？

今更だけどオリ主最強系？

Side 茶々丸

「シャルさん……」

私は今、StarBookSCoffeeにてマスター達を待っている。

ただ待っているだけなのに、どうしても昨日の事を思い出してしまう。

……あの時起きたドキドキは何だったんだろうか？

『心』が無い私にはわからない……

「茶々丸ここにいたか。」

「いや、ここに待たせたんだろ。」

「や？」

……マスター達が来たようですね。

「昨日のじじいの話だがな、桜通りの件に感づかれたようだ……」

「要するに、次の満月までは派手に動けんな。」

「シャルの言う通りだな。……もっとも坊やが、動けばこちらも対処はするがな……。」

「……どうした茶々丸？」

「……………」

「昨日から様子が少し、おかしいな。何かあったのか？」

「力になれるかわからんが、副担任としても同じ従者としても相談には乗るぞ？」

「……………」

貴方の性で、こんなに悩んでいるのですが……

「いえ、なんでもありません。」

「そうか？ならばいいが……………コーヒー貰うぞ？」

「……………自分で買えよ。」

「何の話をしてるんですか……？三人とも？」

「ハカセには関係ない話だよ。」

「しいて言えば、大人の話さ。」

「ふーん……………大人？」

「深く考えるな葉加瀬。」

「あ、泥が詰まってる。もっと丁寧に動いてね茶々丸。」

「申し訳ありませんハカセ。」

「……………流されたな。」

Side シャル

「ハックション！！」

「お二人共大丈夫ですか？」

あゝ頭イテエ。

喉イテエ。

『最強種二人共風邪って何か笑えるね♪』

「…私が風邪をひくのはわかるが、貴様は何故風邪をひいている？」

「昨日は、滝に打たれて修行をしていたからな。」

「まだ夏になってもなっていないのに滝浴びだと？……………馬鹿か？」

「……………」

う、うるへー！

おかげで新しい技が出来たからいいじゃねえか！

『でも滝と関係ないよ？』

……………。

「飲み物をお取りに行きます。」

「……………悪い茶々丸。」

俺達に一言残し、茶々丸は一階に降りていった。

「ゴホゴホ！」

「コホツコホンツ！」

「ゴホゴホ！オエ！」

「ハアハア……………コホンツ」

「ゴホゴホ！……………なあエヴァ？」

「……………なんだシャル？」

「……………情けない俺達。」

「……それを言うな。」

「……………」

「……………」

「！……………なあエヴァ気付いたか？」

「……………ああ、坊やだな？」

「……………俺は動きたくないから、ここにいるぞ。」

「……………私は行くぞ？」

そう言い残すとエヴァは、一階に降りていき……………

——五分後

「コホンッ コホンッ！」

……………自分のベットに戻ってきたのだ。

「この人達ホントに最強種ですかっ！？」

……………俺もそう思うよ。

ってネギ。

大声出すなよ！
頭に響くだろ！

S i d e ネギ

うゝ何で敵の僕が看病しなきゃいけないんだろ？

パジャマを着替えさせた時なんか、シャル先生に凄い睨まれたし……

シャル先生か……

エヴァンジュリンさんの従者何だよな？

どうして従者をやっているんだろ？

なんか気になるなゝ。

「昔の写真とかない」「やめろ！」「うひい！」「ごめんなさい！」「

「やめろ！ガ○バスターはまだ完成していないんだぞ！」「

「夢？だよね？」

…ガ○バスターってなに？
変わった夢を見ているんだなゝ。

……夢？

そっだ……！

「ラス・テルマ・スキル・マギステル」

人の夢を覗き見るなんていけないコトな気がするけど……

シャル先生とエヴァンジュリンさんの関係がわかるかも……

「夢の妖精 女王メイヴよ 扉を開けて 夢へと いざなえ……」

意識が夢へと移っていく

夢に入る際に起きる光の道を抜け先には……

「バスオービーム……！」

……黒いロボットがビームを放っていた。

「え、え……！」

「お姉様、アレを使うわ。」

「ええ、よくってよ。」

「バス〇ーキック!!!」

電気を纏った蹴りが、何千の怪獣を光に変えていく。

「これって本当にシャル先生の夢なの!」

……世界がグルリと変わり、宇宙から剣が至る所に刺さった丘へと場所が、移った。

「す、凄い!一つ一つの剣から凄い魔力を感じる!」

弱い物で魔法使い一人分、強い物で魔法使い百人分の魔力を感じる!

「……魔法使いよ、魔力の貯蔵は十分か?」

「え!?!」

剣に夢中になっていて、人の気配に気付かなかった。

僕の後ろには、白髪に紅いコート?を着た男の人と……

空中に浮いた数多の剣が矛先を僕に向けて停滞していた。

「行け!!!」

「ぴ、ピギヤー！」

高速で飛んで来る数多の剣が、僕を貫く瞬間……

……世界は、また移った。

「た、助かった。今度は森の中だね？」

周りを見渡せば、木々に囲まれ森だと判断出来た。

……一部を除いて。

「何だろう？あの白いロボット！？」

近付いて見様にも、足が動かなかった。

そして、ロボットにも動きが見られた。

月から光の線が、ロボットの胸に当てられる。

「マイク○ウェーブ来る！」

ロボットは、背から長い砲身をこちらに向けて、羽根をX状に開いた。

そして羽根が光り……

「サ○ライト○ヤノン発射！」

高エネルギーが、僕に目掛け発射された。

くっ！直撃する！

「風花・風障壁！！！」

……しかし、障壁など無かったかの様にエネルギー体は、迫ってくる。

「そ、そんな〜！」

エネルギー体が、僕を飲み込もうとした瞬間……

「ただの人間には興味ありません。この中に宇宙人、未来人、異世界人、超能力者がいたら、あたしの所に来なさい！……以上。」

と黒い髪の女性が言い放っていた。

………そして世界は移る。

「……何だっただろ今の？」

今度は、全てが黒く光が無い世界だった。

「……これは、シャル先生の夢なのに、みんな違う夢を見ている見
たいだった。」

うーん、シャル先生って何者何だろう？

「……もしかしてコレは、夢じゃないんじゃないかな？」

「……全て夢だよ。」

「えー!？」

後ろを振り返ると……………

……………シャル先生がいた。

「夢だった証拠に痛くなかっただろ？」

「確かに……でもおかしいです！シャル先生は寝ている筈なのに何
で、僕に話し掛けられるんですか!？」

「……彼は寝ているけど、僕は起きている。それだけさ。」

「?。」

「わからなくても言いさ。……さて、覗き魔にはご退場してもらっ
よ?。」

「えー!？」

シャル先生が、刀を抜いたので、僕も身構えるが……

……あっさりと斬られてしまった。

「そ、そんな……」

全く見えないなんて……

「上には上がいるだけさ。精進しろよネギ少年。」

これがエヴァンジュリンさんの従者の力……

「シャル……せ……ん……せ」

僕の意識は、強制的に自身の身体へ戻っていった。

S i d e シャル

随分酷い事するな。

『最近遊び相手がいなかったからつい』』

まあ、最近コイツ調子こいてたから許す！

『りょかい』

今話題に上がっているネギ少年は、俺の横で気絶もとい睡眠中……

「ネギ先生、お薬を貰ってきました。……シャルさん起きていたのですか？」

「今起きた所だ。申し訳ないが、ネギは寝ている。」

「そうですか……ならネギ先生のベットを用意しな「必要無い」……しかしそれではネギ先生が風邪をひいてしまいます」

「いや、俺は風邪が治ったらしい。俺の所に寝かせてやれ。」

「……わかりました。」

俺はベットから立ち上がり、変わりにネギ少年を寝かせた。

「スウー スウー。」

「スウー スウー。」

「二人揃って気持ち良く寝ているな……」

「ネギ先生に二人の看病はキツかったですでしょう。」

「……そうだな」

⌋
⋮
⌋

⌋
⋮
⌋

……なにこの空気？

「さあ。」

でも、こう見ると風邪をひいた子供を見守る親みたいだね ♪

な!
?

「……しかしこう見ると風邪をひいた子供を見守る親みたいだな。」

ちよつと待て〜！

俺なにいつてるの？

『風邪で弱つてた君を乗っ取るなんて、たわいもないことさ。』

/
 /
 |
 !
 !
 !
 !
 !
 !
 !
 !

⌈
/
/
/
/
/
/
/
⌋

「……茶々丸？」

「す、す、すみません！少しの間機能が停止してました！お飲み物を取りに行ってきます！」

そう言い残すと物凄いスピードで階段を降りていき……コケていた。

うわゝ絶対変に思われたわ。

『そう？良い感じだったけど？』

エヴァが寝てて良かった。

『でも一つ言える事があるよ？』

ノノも感じたか……

『うん。これで……』

『「ネギフラグ消滅！！！」』

ノノと俺は、心の中で歓喜したのだ！

『……でも君のフラグは、立ったよね？』

なに！

『主と従者の三角関係』
♪』

……。……。

ストーリーカード × 誤解Ⅱ 死亡フラグ（前書き）

更新が遅れた事をお詫びします。

ストーカー×誤解Ⅱ死亡フラグ

Side シャル

——作戦開始5時間前

「今宵こそ坊やの体液を絞り尽くして呪いを解き！」

「マスター、鼻血出てます」

「『闇の福音』とも恐れられた夜の女王に返り咲いてやるうゝゝつ
！！」

「……なにを叫んでいるんだ？」

「ふわあ！？……シャルか。」

「こんにちは、シャルさん。」

「こんにちは茶々丸。……でも学校だと、さんじゃなくて先生
な。」

「……はい。」

「それで、作戦の方はどうだ？」

「坊やが、神楽坂明日菜と仮契約を結んだが、問題は無い……..
パートナーに差があるな。」

「そうだな。俺と茶々丸だけでも勝てる。」

…実際どうなのよノノ？

『9：1でエヴァ優勢。………神楽坂明日菜と言つ不定要素が有るけど、君一人でも勝てるよ？』

やっぱそんなもんかゝ

「まあ、油断せずに行こうか。」

「ああ。」

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

——作戦開始1時間前

「……さて、行くか。」

「ああ、……茶々丸は、どうする？」

「後から合流するさ……」

ネギとの対決の為、エヴァハウスを後にした。

うん。

このまま原作通り行けば、エヴァは、ネギに負けるけど……

『僕達と言うイレギュラーが居るからわからないよね』

だよな

「……どうしたシャル？
浮かばない顔をして？」

「……なに、少し気になる事があってな。」

「それは、作戦に対する物か？それとも……先程から後をつけている鼠に対する者か？」

「鼠？」

『え！？気付かなかったの？5時間前からつけられてたよ？』

アレって尾行だったんだ。

気配有りすぎだし、殺気出しまくってたから、俺に対するストーリーだと思ってたよ。

『……それでどうするの？』

そうだな

ずっと殺気当てられるのは勘弁だから相手でもしてやるか！

「あの鼠……いや、鳥は俺に用があるようだな……」

「ふ、鳥と呼ばれて殺気がさらに上がったな。」

「……俺は、鳥の相手をしてくる。……俺がいなくても大丈夫か？」

「侮るな。……今の私は、貴様と同等の力を持つ。」

「……悪いな。今回は、エヴァの『牙』には、なれないようだ。」

「ふん。またの機会を待たせ。……では、行ってくる。」

「ああ、成功を祈るよ。」

そして、俺達は二手に別れた。

さうして！頑張つて『現実』を教えてあげるかな！

『Yes！Let's ぶつ殺！』

……いや殺さないよ？

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

エヴァと別れ、俺は麻帆良特有の森の中に移動した。

今更だけど、なんで学園内に森があるんだろうね？

『……………野性児を育てる為？』

はい！ダウト！！！！

つか、コントしないで、速くエヴァを追わなきゃ！

『スト〜カ〜♪』

うるさい！！！！

「……………いい加減出て来たらどうだ？桜咲？」

俺は、気配を感じる所に声を掛けた。

そうすると、意外にも素直に、身丈とは合わない日本刀？を持った少女が出て来たのである。

「……………こんばんわ、シャル先生。」

「こんばんわ、桜咲。……………個人面談は、学校にいる時にしてほしいな？」

「……………先生に聞きたい事があります。」

スルーですか？

返事してほしいな？

キャッチボールが出来てないよ？

「……なんだ。」

「色々と聞きたいのですが……」

……なぜ私が『人外』と気付いたのですか？」

やっぱり、そこね？

原作を知ってるから？

いや、それだと不自然だよな」

『取り合えず、僕の言葉通り話して。』

OK Boss！

「……なに、同じ『人外』だから、な。」

「……！！……シャル先生もですか……」

「ああ、俺は竜人。竜の恩恵により生まれし者。……人ではない。」

「……………」

「他にはないのか？」

「…………貴方は、エヴァンジュリンさんの『牙』と言っていましたか？
…………本当ですか？」

「ああ、俺は、エヴァの『牙』。…………従者だな。」

「…………隠さないんですね。」

「俺は、エヴァの従者として誇りを持っている。」

「つか、エヴァの従者って気付いたら俺が、『人外』って気付かない？

『君は『封竜のピアス』をしてるから、気付かれないんだよ？』

…………何気にハイスペックのピアスなんだね？

『でも、戦闘する時には外してね。』

え！？なんで「最後に！！」……………桜咲もKYか？

「最後に！！！！」

なんで二回言った！？

「貴方は……お嬢様の敵ですか？」

……本当にお嬢様LOVEなんだな。

ここでYESって言ったら絶対に戦闘開始だよね？

『僕は、殺りたいな♪』

……却下。

殺すのはダメ！

仮にも生徒でしょ？

『君の生徒だけど、僕は違うよ。』

そうだけど……

「……そうだ。」

「……！」

ちょっと待て〜！

ここは、声出さなくていい所だから！

「……お嬢様を狙うなら例え担当の生徒でも手加減しません。」

ちよつと待てよ！

これは、本音じゃないから！

「斬鉄剣！」

ぎゃあー！

切れるー！

つか、パンツ見えるぞ！

スパッツ履いてるから大丈夫！って考え良くないよ！

『L e t ' s ぶつ殺』

ノノてめえー！

桜咲の斬撃をノノから教わった『竜演舞』の応用で避けてる。

『早くピアスを外して！』

そんな余裕ねえよ！

……ノノとの会話に気を取られてしまった。

「竜種撃滅・奥義……………斬竜剣！！！」

「くっ！」

スキをつかれ、技を出されてしまう。

やべ！避けきれねえ！

腕をクロスさせ、更に翼を出しガードの体制にはいる。

ネギの魔法の射手を無傷で受けられる程の翼の強度だ！

受きれる！

『ダメだ！避けてて！』

翼と太刀が、ぶつかり会う。

負けたのは――翼だった。

「ガバツ！」

切断は、されていないが、傷は深く、血が夥しい程出てしまった。

うわぁー！超イテエー！

つか、何で切れるんだよ！

『あの技は、対竜種の技だから相性が悪いし、君が纏っている魔力・気を『封竜のピアス』が、全て吸い取っているんだよ！』

超有難迷惑！

てか、マジやば……

血を流し過ぎてクラクラしてきた。

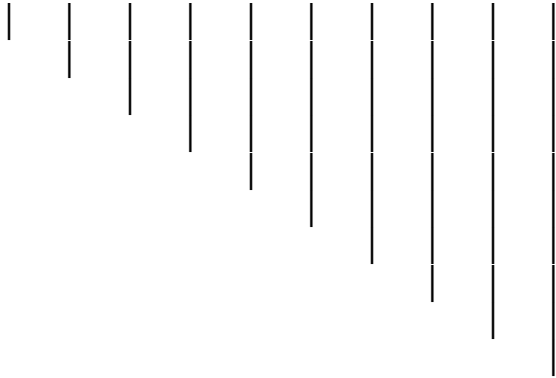
『ダメだよ！強く意識を保って！傷口を気で覆うんだよ！』

もう無理……

げ……ん……か……い……

あとは……たのん……だ……

俺の意識は闇に落ちていった。



『太陽』が沈むと『月』が登る。

一緒に出る時はあるが、『太陽』の光で『月』は目立たない。

また、『シャル』と『ノノ』の関係も同じ様な者だ。
『太陽』が沈むと、『月』が登る。

すなわち――

「……………僕の番か。」

復活×挑発Ⅱ友情？

Side 桜咲

「ガバツ！」

私は、迷う事なく『夕凧』を振るった。

……倒れ伏すシャル先生。

大量の血が先生を赤く染めた。

——シャル先生。

副担当として学園に来て、エヴァンジュリンさんの従者。

私の攻撃を軽々しく避け、実力を隠しながら戦っていた。
あのスキが、無ければ私は、負けていただろう。

しかし、今更だが思う所がある——

——なぜ、本気ではなかったのか？

私の実力が無い為、遊んでいた？

私を、いたぶる為？

いや、考えるのはよそう……

私は、もう斬ってしまったのだから……

無意識の内に『夕凧』を握る手に力が入る。

長居もしたく無かったので、早々に帰ろうと『夕凧』を鞘に納めようとした時………気付いた。

「これは!？」

『夕凧』にヒビが入っていた。

数多の戦場を長と共に、勝ち残ってきた『夕凧』にヒビが………

シャル先生の翼は、これ程の強度を誇っていたとは!

……今更だが、シャル先生の異常性が多い。

エヴァンジュリンさんの従者……

恩恵を受けた竜……

そして裏の読めない行動………

「……シャル先生貴方は何者なんですか?」

「……教えてあげようか?」

「え!？」

……驚いた。

致命傷を受けた筈のシャル先生が、平然に立ちホコリを叩いていたのだから。

「教師に手をあげるって、ヤバくない？僕じゃなきゃ死んでたよ？」

……ありえない。

あの血の量だと死んでもおかしくない筈。

現に、今だって血が流れて……ない!？

しかも、傷が無くなっている！

「……どうやって治したんですか？」

「ん？ああ、自身の『気』を高めて治癒能力を促進させたただだよ。」

「とことん有り得ない存在ですね？」

流石は竜種ですね。

………しかし、なんだ？

口調といい、行動といい、『今までの』シャル先生と違い過ぎる。

人格が変わったかのように、別人だ。

「……貴方はシャル先生ですか？」

……思わず口に出てしまった。

「へえ」僕と彼の区別が解る人がいたんだ！そういえば君が初めて気付いた人だね」

……？

「僕の名は……ノノ・S・ダオラ。……元の身体の主にして、今はシャルの戦闘衝動の根源かな？」

「……なにを言ってるんですか？」

「だから、可笑しいと思わない？ 基本的にシャルは戦いが嫌いなのに、さっきは交戦的だったでしょ？」

「……避けてばかりでしたけど。」

「それは、僕と彼の意見が違うから言動がズレる訳。」

「意見が違う？」

「最初に言うけど、僕もシャルも君のお嬢様に手を出す気はなかったよ？」

「ならなぜ肯定したのですか！？」

「それは、僕が遊びたかっただけ。肯定しなきゃ戦ってくれないでしょ？」

「な！？そんな事だけの為に挑発を？」

「そうだよ？……さて、折角外に出たんだ。シャル以外の人と話すのは楽しかったけど、闘うか！」

「待ってください！先生がお嬢様を狙ってないのなら、私には闘う理由はありません！！」

「君に無くても僕にはある。……シャルの仇と僕の趣味。」

「シャル先生の傷は申し訳ないと思いますが、私は戦闘狂ではありません！」

私はお嬢様の剣。

私は……お嬢様を守れば満足なのだから。

「頑固だね？……でも君が護衛なんて、お嬢様も可愛そつだ。」

「……どう言う事ですか？」

「上には上がいる。……君程度の實力じゃ、お嬢様を守れないよ？
……僕が稽古してあげるよ？」

「……………」

「僕が無料で稽古するなんて貴重だよ？ラッキーだね君」

「……………」

なんかイラッて来ましたね。

上から目線と言うか、人を見下して！

「……良いんですか？先程の傷じゃ私が勝ってしまいますよ？」

「傷は塞がったから……シャルと違って僕は手加減が出来ないから……殺しちゃったらごめんね？」

「私はお嬢様の為にも死にません。……シャル先生も教師が生徒に負けた言い訳を考えておいてくださいね？」

「ふふふ」

さて、この竜に現実の厳しさを教えてあげます！

「行きます！シャル先生！」

「ノノ先生と呼んでね♪」

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

Side タカミチ

先程、学園長から、学園東竹林地帯で激しい戦闘が行われていると連絡があり、僕はその場に急行した。

僕の任務は、学園の結界が無くなっている間に来る侵入者の排除の筈なんだが……………。

「攻撃パターンが直接過ぎるよ？もつと虚をつなきゃ♪」

「わかってます！」

……………目の前で、刹那君とシャル先生が激戦？を繰り広げていた。

二人共、侵入者に間違われているよ？

「神鳴流奥義……………百烈桜華斬！！！」

「技の出が遅いよ？……………閃鞘・八点衝！」

二人の一名複数攻撃が激突する。

技の余波で周りの木々が倒されていく。

「くっ！お強いですね！ノノ先生！」

「君も予想以上だよ？名前を聞いておこうか？」

「はい！桜咲刹那です！」

「刹那ね。……次いくよ」

「はい！お願いします！」

さらに、二人の戦闘は激しさをます。

……学園長、僕に『コレ』を止ると？

刹那君が積極的に攻め、シャル先生が、それをいなしていく。

シャル先生の技は、見ていて参考に成る程素晴らしい物だ。

僕も止めるのを忘れ暫く二人の戦闘を見学していた。

ん？結界が復旧したな？

P P P …… P P P …… P P P ……

「はい、高畑です。……ああ、学園長。ええ、はい。こちらでも確認できました。

そういえば、ネギ君は勝ちましたか？ 本当ですか！？ そうです、ネギ君の将来が楽しみです。

……え？まだコツチに強い気の反応がする？

いや、侵入者ではありません。シャル先生と刹那君が修業を……。

え！？速く止めろと！？

しかし、学園長！二人の戦闘を止めるには、ホネがかかりますよ？

あ！待ってください！学園長！がくえN……」

ツーツーツー……

通話時間 5分49秒

「……はあゝ。」

学園長勝手過ぎますよ。

「……咸卦法・居合い拳！

僕は仕方が無く、二人を止める為、居合い拳を放った。

「「！！！！」」

刹那君は瞬動で避け、シャル先生は翼でガードした。

……シャル先生はともかく、刹那君まで感知出来るとは。

「高畑先生！？」

「……タカミチか。」

二人から送られる視線、一つは驚きの物。

……もう一つは殺気が混じり、いかにも邪魔すんなって感じの視線だな。

「……シャル先生、邪魔したのは悪かったが、殺気を飛ばすのは辞めてくれないか？」

「……ふん。」

「ハハハ……」

「高畑先生どうしてここに？」

「学園長から強い『気』を感じたから調べると……
で、犯人は君達だ。」

「す、すみません！つい夢中になってしまいました！」

うん、素直に謝れる事は良いことだ。

……だから、シャル先生いい加減殺気を飛ばすのを辞めてくれ。

「……興が反れたね。続きは今度にしよう。」

「はい！またお願いします！ノノ先生！」

……ノノ先生？

「所で、タカミチ。エヴァはどうなった？結界が戻った様だけど？」

「ああ、ネギ君が勝ったみたいだね。」

「……そっか。また遊んだみたいだね。」

「そうみたいだ。」

「す、すみませんノノ先生！エヴァンジュリンさんの従者なのに私が邪魔してしまい。」

「良いつて、シャルは、エヴァの従者だけど僕は違うから……それより、刹那の刀貸して。治すから。」

「え、本当ですか！？」

「うん、ついでに強化もしてあげる。」

「ありがとうございます！」

うん、一件解決したのは良いけど、僕を空気にしないでね？

「一段落も着いた所だし、刹那君は帰りなさい。夜遅くまで外出するのは良くないよ？」

「あ、はい。では失礼します。ノノ先生、高畑先生。」

そう言い残すと刹那は、足早にその場を後にした。

「……さて、少し良いかな？ノノ先生？」

「……………」

「君はシャル・N・ダオラじゃないのかい？」

「……そのうち話すさ。」

「……信じていいかい？」

「もちろん。……僕は行くよ？多分、負けたエヴァの酒の相手をしなきゃいけないから。」

「相手するのはシャル先生だろ？」

「ふふ、そうだね」

僕に軽く笑いかけ、一瞬にしてノノ先生は闇^{もり}に消えていった。

「……凄い瞬動だ。」

シャル先生に対する謎が増えてしまったな。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

S i d e シャル

「いいかシャル！私は速く自由になりたいのだ！」

「ケケケ、先ガ長イナ！」

「マスターそんなにネジを巻かれたら！」

「……なにこのカオス。」

目の前に、酒臭い我が主と、従者の人形。

……酔っ払いの相手に困ってる口ボ従者。

つか、魔力ガンガンに強くしてネジ巻いたら茶々丸が……

「~~~~~!？」

……やべ〜色っばい。
っ〜かエロい。

『エロナスビ♪』

誤解してるぞノノ？

男の半分以上がエロなのさ。

『あ！刹那が僕が存在を知ったから♪』

マジで！！！！

復活×挑発Ⅱ友情？（後書き）

今更ですが、シャル死亡フラグ多すぎなような……

おやつは……円まで！（前書き）

中間点なので短いというより、内容薄いです。

おやつは……円まで！

Side シャル

「う、うゝ頭が痛い。」

「飲み過ぎだぞ、エヴァ。」

『ケケケ、苦シミヤガレ♪』

「うるさいぞ！茶々ゼロ！ う！頭が……」

「マスター、『ウコ○の力』を買ってきました。」

「すまない茶々丸。」

ども！絶賛二日酔い中の我が主と愉快的な従者達です♪
しかし、二日酔いでダウンするってどうなのよ？

『未成年〜♪』

いや、相当歳いつてるから（笑）

でも、いつまでも唸られるのもキツイから気分転換させるか。

「エヴァ、外の風を当たりに行ったらどうだ？
少しは気分が晴れるぞ。」

「む？……そうだな。」

珈琲でも飲みに行くか。」

「お供します、マスター。」

「ケケケ、土産ヨロシクナ。」

「買ってくるか！ う！頭が……」

「……いいから早く行くぞ。」

YES！ G o t o S t a r B o o k S C a f f e ！

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

「あ……」

「ぬ……」

「お……」

「こ…こんにちは エヴァンジュリンさん。」

「フン！気安く挨拶を交わす仲間になっ たつもりはないぞ。」

「こんにちはネギ先生アスナさん。」

「よう！ネギ先生 神楽坂。」

……俺に挨拶無しかよ。

シメてやろつか？

『器が小さいね』

うるせー！

「ふふん」

つか神楽坂が俺をガン見しとるんだが……

「……なんだ神楽坂？」

「聞きましたわよ——シャル先生ってエヴァンジュリンの事ずっと昔から好きだったんだってね」

「ぶ——っ！——！」

「ぶはっ！ゴホゴホ！」

「ア、アスナさ……」

「な、なんなんだ！その話は！？」

「い、いえ、あの……」

「学園のみんなが、この噂をしっているわよ？」

「そうなのですかシャルさん？」

「どうなんだシャル！」

……いや、まさかこんな噂が回ってたとは……

『誰から回ってるんだろっね？』

朝倉あたりじゃないか？

まあ、受けを狙って……

「ああ、エヴァの事は好きだぞ。」

「「「！……」」」

「な、な、な、何を言っているんだシャル！」

おゝおゝ

いい具合にテンパってるな

「わ、私にはナギと言う心に誓った奴がいて、いや！決してシャルが嫌いな訳ではなく！私は「あくまで主としてな。」 ふえ？」

「主としては最強だ。信頼を置くには最適だな。…………だから言
つてそれが、『愛』だと言われれば、わだ俺にはわからない。」

どよよ！

この解答！

どこの生徒会の副会長みたいにハーレムなんて作らないぞ！

『解答としては30点。それが証拠に……………』

「「「……………」」」

『…………この沈黙』

な、なんだと！！

この完璧な解答が！

「そ、そういえばナギってあんたが探している人でしょ？」

「そ、そうですね！アスナさん。」

わあゝお！

スルーですか！？

先生をスルーですか！？

「エヴァンジュリンさん、父さんについて何か知っていませんか？」

「ふん！………奴は死んだ。十年前にな………」

「え………」

……なに？いきなりシリアスな話してんの？

先生をスルーしといて？

『まだ根に持つてるんだ。』

「でもエヴァンジュリンさん！僕 父さんと——サウザンドマスターと会った事があるんです！」

「………何だと？何を言っている！奴は十年前に確かに死んだ！！お前は奴の死に様を知りたかったのではないのか！？」

「で、でも——！」

おゝおゝ

エヴァの気迫に押されてるな？

仕方がないから助け舟をだしてやるか。

「………エヴァ、ネギ先生が持っている杖はサウザンドマスターのではないか？」

「な！？」

「そうです！6年前のあの雪の夜に…僕は確かにあの人に会って杖を貰ったんです！」

「……そんな奴が——サウンドマスターが生きているだと……。」

うん。上手く話を持って行けたな！

俺のtalk levelはMAXまであがったぜ！

『スルーされるけどね』

ノノ！まだそのネタを持つてくるか！？

「——フ…フフ、ハハハハ！そーか！奴は生きているのか！ソイツは愉快だ！」

「そ、それで手がかりを聴きたいんですけど？」

「——京都だな！京都に行ってみるがいい！何処かに奴が一時期住んでた家があるはずだ。」

「き、京都！？あの有名なええ〜と日本の………」

良い具合にテンパってるな〜ネギ♪

しかし修学旅行か〜行きたくね〜。

『僕は行きたいな？』

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

——学園長室前

教室で3・Aが小学生みたいに盛り上がってる中、俺とネギ少年は学園長に呼び出しを喰らった。

しかし、しずな先生って可愛くね？
マジやべ〜んだけど。

「ああ、それとシャル先生。先にネギ先生に話があるそうでシャル先生は少し待っていてくれませんか。」

「……………わかりました。」

しずな先生が言うなら何分でも待ちます！！！！

「ではお願いしますね。」

そしてしずな先生は、去っていった。

……………しかし、俺を待たせるなんてジジイの奴舐めた事しやがる！

『あれ？しずな先生は良くてジジイはダメなの？』

もちろん！俺はフェミニストだからな！

でも、修学旅行か〜。

行きたくね。

『どうして？君の夢は『世界を見て回る』事だよね？』

そーなんだけど。

エヴァと一緒に回りたいんだよね。

エヴァを残して一人回る何て嫌なんだよね。

『……なら僕が行くよ。』

……What?どうやって？

『博物館の宝に面白い物があつてね。』

……ふん、まあお前に任せるわ。

『うん、任せて！』

「シャル先生。入ってください。」

お！呼ばれたか。

さあゝて行くかな。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

「———と言う訳なんじゃよ。」

「つまり、俺にネギの護衛をやれと？」

「そうなんじゃ。行ってくれるならそれなりの報酬はだ」「断る」
「……やはりダメかの？」

「主を置いて行く事は出来ない。」

「フオゥ……いざとなった時動ける人材がほし」「だが！」「……最後まで言わせて欲しいの。」

「条件付きで俺の友を呼んでやるよ。」

「ほお！友とは？」

「……俺と同じ存在で、俺より強い奴だ。」

「なんと！そのような者がいるとは！？……しかし、信頼は出来るのかの？」

「……奴は俺を裏切らない。信頼していい。」

「うむ、ではお願いするでしょう。……それで条件とは？」

『ハーゲンダッツ一年分！』

「……いや、違うから！」

「つか、そんなに好きなのかよ……！」

『……冷たいのは嫌いだよ？』

……なんだよそれ。

「……今年の卒業式でエヴァも卒業させる事だ。」

「なんじゃと!?!」

「条件が飲めないのなら、この話は無しだ。」

俺は、そう言うとジジイに背を向けた。

「ま、まつんじゃ!」

「……条件を飲むのか?」

当然の様に引き止めるジジイ。

「エヴァの呪いを解くにも、ナギの掛けた呪いじゃ。……解くにも
一苦労するんじゃないよ。」

「なに、呪いは俺が解くさ。」

「なんと!あの魔力任せの強引な呪いが解けると!」

「ああ、だから卒業を認めてくれればいい。」

「うつむく、け、検討しよう。」

「……良い返事をまってるぞ。」

案外すんなりいったな？

『それ程切羽詰まってるんじゃないのかな？』

うん。どうだろ？

まあいいや。

帰って修学旅行の準備すつか！

『オォー！』

俺達は張り切ってその場を後にした。

『バナナは、おやつに入りますか？』

NO!!!!!!!!!!!!!!

なまもの禁止！

おやつは、300円まで！

おやつは……円まで！（後書き）

脱字や誤字がありましたら、ごめんなさい。

GO! 京都へGO! (前書き)

この話から修学旅行編に入ります。

GO! 京都へGO!

Side ?

……久しぶりの外だ。
何だかウキウキするな♪

「おはようございます。」

「おはようございます!」

お〜お〜♪
人が沢山いる♪

……まるでゴミの様だ!

……突っ込む人がいないって悲しいなあ。

「はい!おにぎり美味しかったです!」

おっ♪ネギ少年発見!

さ〜て行きますか♪

「お待たせしました。ネギ・スプリングフィールド先生で宜しいでしょうか?」

「あ、はい!そうですが、貴方は?」

「ジジイ……学園長から連絡が合ったと思いますが、ノノ・S・ダオラです。」

「はい！伺っています。何でもシャル先生の弟さんで日本見学の為に来日したんですよね！」

「はい、日本の伝統ある文化を学ぶ為に、今回だけはお願いします。」

「はい、お願いします！………今回だけは？」

「では失礼します。」

「あ、ちょっと待ってください！」

待たないよ〜
ネギ少年なんて無視！

無視・スルー・空気の三代シカトコンボを食らわすから〜

……でも今回の任務は、ネギ少年の護衛。

ある程度は、付き合わなきゃいけないのか〜。

嫌だな〜。

第一、『僕は立派な魔法使いになる!』って言っているのに世界を
まるで知らない所がム力つくな」

……闇討ちでもしてやろうかな?

「……………シャル先生。」

でも、そうしたらシャルの奴怒るからな。

「いや、……………ノノ先生?」

上手く事を進めたいな」

「ノノ先生!」

一掃の事、関西呪術協会を崩壊させてやろうかな?

「ノノ・S・ダオラ先生!」

「はい、何でしょう刹那?」

「聞こえているのなら、返事してください!」

「いや、考え込んでいてね」んで何?」

「私の班が欠席者が多くて、ザジさんと私の二人になってしまった

んで、指示を貰おうとしたのですが……………」

「班の事は、ネギ少年に聞いて、僕は、ただの見学者だから」

「わかりました。……………もう一つよろしいでしょうか？」

「いいよん」

「……………何故ノノ先生がいるのですか？」

「うん、話が長くなるから新幹線の中で話すよ」

「……………わかりました。では行きますね。」

「あいあい」またね」

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

Side シャル

「……………」

……………グロッキーだ。

「まだ寝ているのか！もう昼になるのだぞ！」

「……………すまない、もう少しだけ寝かせてくれ。」

「珍しいですね、シャルさんがまだ寝ているのは。」

「……ちょっとした実験をしているな。」

「実験だと?」

「ああ、エヴァ達には話したよな? 俺にはもう一つの人格が居るって……。」

「……『ノノ』の事か?」

「……ソイツを外に出したくて、な。」

「……人格を出すのは可能なのか?」

「結果的には成功した。」

「……過程はどうした?」

「……魔力の大量消費に加えて疲労困憊だ。」

「しかし、おのれの力だけで人格の解放をするとは………」

「俺『だけ』ではない。」

「……なに?」

「……博物館で拝借してきた『ミヨリンの指輪』で『ノノ』の魂を

固定した。」

「な!?! あれ程のアーティファクトを所有していたのか!?!」

「ああ、今は、ノノが持っている。」

所有ってか盗んできたんだけどね（笑）

「……アーティファクト図鑑に見当する物を検索。

『ミヨリンの指輪』

かつてオーディンが予備の肉体を保存する為に作られたアーティファクト

効果は……魂・時間・存在を保存又は留める力を持つ指輪。

価値は高く、オークションに出展すれば一生暮らして行ける富が手に入る、と載っています。」

「説明ありがとう。……んで強制的に外に出したノノを指輪の力で留めているんだ。」

「……随分ふんばつするんだな。」

「まあ、俺の半身であり、『友』でもあるからな。」

「ふん! 貴様が納得しているなら文句は言わないがな……」

「ああ、久しぶりの外だ。思う存分楽しんで欲しいよ。」

そして三人 + α は同じ空を見ている筈のもう一人の竜人に思いを寄せたのだ。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

S i d e ノノ

「……そういう事があつたんですね。」

「うん、これがその指輪だよ。」

そう言い、中指に着けている『ミヨリンの指輪』を見せた。

「しかし、ノノ先生が来るとは……学園長もそれ程、今回の修学旅行を危惧しているんですね。」

「そうだね、まあ報酬分は働くから。……あと、今は先生じゃないから呼び捨てでお願い。」

「あ、はい！わかりました。」

「よろしい！……ん？」

「……来ますね。」

「そうだね、……これは、式神かな？」
前の車両から一羽の燕が飛んで来る。

「ここは、私が……」

「おねがいね。」

刹那は、向かってくる式神を狭い車両とは関係無しに切り捨てた。

「……この狭い車両で、これ程うまく野太刀を振るうとは……おみごと！」

「いえ、まだ修業の身ですよ。」

「ふふ、君程の者が守る『このかお嬢様』って人に興味が沸くよ。」

「……会えば氣にいますよ。しかし、これは、親書でしよ
うか？」

「開始早々奪われるって雑魚過ぎだなネギ少年……。」

「待て——っ!!」

「……今頃追いついたのかよ。」

「!？」

「…………ネギ先生……。」

「こんにちは。」

「さ……桜咲さん、ノノさん……?」

「あの……コレ……落とし物です……」

「え……あ——っ！これは僕の大切な親書！！」

……おいおい、まだ敵が入るかもしれないのに、親書って大声だなよ。

「あ、ありがとうございます助かりました！！」

「それは先生のモノですか？」

「……ネギ少年よ。情けないよ？」

「え？少年？」

「そうですね。……気をつけた方がいいですね 先生——特に……向こうに着いてからはね……それでは。」

「Good Rack！ネギ少年♪」

「あ、どうもご親切に……」

僕と刹那は、その場を移動した。

「……んで、どうだった？」

「……ネギ先生は優秀な西洋魔術師と聞きます。大丈夫でしょう。」

「……過大評価だね。」

ん、簡単な任務だと思ってたけど、何だかきな臭いなあ。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

その頃シャル達は……

「……買ってきたぞ、エヴァ。」

「待っていたぞシャル！早速やるぞ！」

「待て、二人でやるのにはキツイぞ？」

「むう！わかった！タカミチを呼べ！」

「タカミチは明日から出張だと聞くが……？」

「関係あるか！早く呼べ！」

「……まったく、災難だなタカミチは……。」

そして俺はタカミチにTELするのであった……。

果たしてシャルが買ってきたモノとは！？

GO! 京都へGO! (後書き)

初めての試みでシャルとノノを離してみました。このやり方が上手く行くか行かないかで今後大きく話が進展すると思います。

あと、今は3ページ書けたら更新しているのですが、もう少し長い方がいいのでしょうか？

意見をくれると嬉しいです。

混浴って夢だよね……………現実にある筈がない！（前書き）

雑になってしまいました。すみません。

混浴って夢だよね……………現実にある筈がない！

S i d e シャル

「京都お——っ！！」

「これが噂の飛び降りるアレ！！！」

「誰かつ！！飛び降りれ！」

「では拙者が……」

「おやめなさい！」

案の定騒ぎまくっている3 - A 達。

そして、真面目に警戒している刹那達は……

「……………皆さん凄いテンションですね。」

「……………そっだね。」

このテンションについて行けずに一歩引いた所から このか を見
守っていた。

「でも意外ですね？ ノノさんは京都に来るのが初めてなので、も

つと楽しんでいると思ったのですが……」

「ん？楽しんでるよ？ 僕みたいな奴は、自然と共感する事ができるから、その建物の歴史を一瞬にして感じる事が出来るんだよ。」

「……凄いですね。」

「凄くないよ？……お嬢様が地主神社に行つたよ♪行かなきゃ♪」

「あ、はい。今行きます！」

お嬢様に気付か無いうちに、後に付いて行き、階段を上りきると……

「きゃ——！」

「な、何また力エル——！？」

……生徒が落とし穴に落ちていた。

「……刹那、妨害つてこんなシヨボいモノなの？」

「……いえ、まだ人が多くいるので手が出せないだけなのでは？」

「……」

「ほ、ほら！音羽の滝に行きましたよ！い、行きましようノノさん
」

「……」

敵の妨害に落胆しながら音羽の滝に向かった。

今度は敵を見つける事も考慮し、建物の屋根からこのかを見守っている、滝と生徒達からアルコール臭が……

「ういゝ」

「はひゝ？」

「……ひつく。」

……酔い潰れた生徒達が転がってやがる。

「……………刹那？」

「お、お嬢様は酔い潰れていないようですね！」

「……………。」

「全くネギ先生は……………仕方ないな……………」

「……………」

「……………」

「……帰っていい？」

「……報酬を倍にするように学園長と交渉しますから、どうか抑えてください。」

「「……………」」

ノノと刹那が、くだらない話をしている中、ネギと酔い潰れていない生徒が、飲ん兵衛をバスに押し込んでいた。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

Side ネギ

ふゝ気持ちいいな。

「凄いいゝこれが露天風呂って言うんだってさ。」

シャワーは嫌いだけど露天風呂は好きになれそう。

「風が流れてて気持ちいいゝね。」

「おうよ！これで桜咲刹那の件が無ければなあ。」

あいつ いつも木刀みたいな持ってるし、魔法使いの兄貴じゃ呪文唱える前に負けちまうよ？」

「うゝん、魔法使いに剣士は天敵だよ。」

「それだけじゃねえ！あのノノって奴も怪しいな！」

「え！？ ノノさんが？」

「だってアイツいつも桜咲刹那というじゃあねえか！ きっとパートナーか協力者に違いねえ！」

うーん、確かにいつも一緒にいるなあ？

でもノノさんは、シャル先生の弟だし、関西呪術協会とは無関係だよな？

思い込んでいる中、カラカラカラっとドアが開いた。

「……………ん？」

「誰か来たよ 男の先生方かな？」

温泉から揚がる湯気が薄くなり、見えてきた人は……………

「コレが噂に聞く『露天風呂』か？」

…………… ノノさんであった。

「なananで！？今の時間は先生だけの筈なのに！？」

「奴も教員と同じ割り当てになってるのさ兄貴！」

味方が分らないので、取りあえず1番奥の方に隠れた。

「ハ——鍛えてある体だね——？」

「兄貴！男の体見てもつまらないぜ？」

つまらない？

上手く分らないけど、本当に鍛えてあるな。

でも、所々体が光ってるけど何だろ？

……鱗？

「……ネギ少年。」

「！？」

「ネギ少年か……全く情けないなあ。シャルに盾突くから、もつと骨があると思っていたのに……」

とノノは星空に向かって呟いていた。

「……独り言か。驚いたぜ。」

「そうだねカモ君。……でもお兄さんの事を呼び捨てておかしくない？」

「そうかねえ？」

二人でノノの事を思考している中、再びドアが開いた。

今度の入浴者は、背が小さく肌が真っ白な……

「「せ、刹那さん！？」」

……桜咲刹那であった。

「なananで！？入り口は男女別なのに 中はおんなじー！？」

「混浴ってんだよ兄貴！」

激しくテンパってる中、刹那は気付かずに湯を浴びていた。

「ヤバいつてカモ君！ノノさんだけじゃなく刹那さんも揃っちゃったよ！」

「……まあ、ノノの奴は違う意味でヤバいけどな。」

「え！？それってどういう意味？」

「いいか兄貴？兄貴はまだ子供だから許されるが、ノノの奴は、いい年だ。……許される筈がない。だから必然的に奴は桜咲に話かける事が出来ないぜ。」

「……そうしたら、ノノさんも隠れようとして、僕達がノノさんに見つかっちゃうんじゃない？」

「……そこは、男同士協力して見つからない様に」「あゝ、刹那かい？」……オイ！奴は勇者か！？」

僕達の予想を裏切りノノさんは、桜咲さんに話かけていた。

「……ノノさんですか？」

「そゝだよ」

「……こういう場合って大声を出すべきですかね？」

「……痴漢扱いは困るね。それに今は、教員の入浴時間だよ？」

「……なら時間を改めて来ます。」

「別に僕は気にしないから大丈夫だよ？……むしろ話したい事があるから、いてくれた方が嬉しいな。」

「……わかりました。」

そついうと刹那は、ノノと岩を隔てて風呂に入った。

「……」

「……」

「……カモ君？こういう場合どうすればいいのかな？」

「すまねえ兄貴。……俺っちにもわからねえ……。」

……ノノさんって凄いな。

女性とお風呂に入ってるのに緊張しないなんて……

刹那さんも男性が入ってるのに、一緒に入るなんて。

……やっぱり二人はパートナーなのかな？

「ふう……」

「困ったようだね？」

「ええ、魔法使いであるネギ先生なら……何とかしてくれると思っ
たんですが……。」

（……え！？）

「ネギ少年は未熟な魔法使いだからね。」

（ええ……！？　な、なぜ僕が魔法使いだと……？）

（兄貴！ノノの奴が教えたのかも知れませんか！）

（そ、そんな……やっぱり、ノノさんは刹那さんの協力者で……刹那
さんはスパイ……？）

（あ、兄貴！魔力が漏れて！）

「……刹那、気づいたかい？」

「ええ、……誰だっ!!」

刹那は、岩のカケラを手に取りライトに当て光を消した。

（しまった見つかった!?!）

「逃げるか!……神鳴流奥義……斬岩剣!!」

「!?!」

刹那の太刀により、岩が二つに断ち切られた。

「（なっ岩が真つ二つに!?!……凄い!） ラス・テルマ・スキル・マギステル……風花武装解除!!」

反撃に魔法を放つネギ。

風花武装解除の効果で刹那の『夕風』が弾かれる!

「ラス・テルマ・スキル・マギステル……風の精霊5人 縛鎖となりて 敵を捕まえろ……」

ノノと言う男性と一緒に入浴していて緊張していたのだろうか、『夕風』を弾かれた事に動揺し、相手に呪文を唱える時間を与えてしまった。

「魔法の射手・戒めの風矢!!」

「くっ!!」

刹那に向けて放たれた風矢……しかし、その矢は刹那に当たる事はなかった。

「……僕もいるんだけどな」『夕凧』借りるよ？」

「ノノさん！！！」

いつの間にか現れたノノが、いつの間にか回収した『夕凧』を持って刹那の前に飛び出してきたのだ。

「長いな～出来るか～？………」

……閃鞘・八点衝。」

ノノの技により無数の斬撃が5本の矢を、いとも簡単に相殺させた。

「えっ！？ ふぎつぎゃぴ！？」

魔法を剣技で消された事に驚いたスキを付かれ、首とアソコを捕まれてしまった。

「何者だ……答えねばひねり潰すぞ？」

「チェックメイト」

「あわあわわわ……」

え！？ ど、どうしよう！

捕まっちゃった！

まだ修学旅行始まったばかりなのに！
まだ親書も渡してないのに！

……それより……握られてる……！！

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞
Side ノノ

「あわあわわわ……」

ん？ 刺客なのに手応えが無いな？

赤みがかかった髪に、この身長。……オマケに白い小動物。

ああ……なるへそ」

「刹那」良く見てみ？……そいつは、ネギ少年だよ。」

「へえ？」

「下の息子を握っちゃって……刹那大胆だね」」

「……あ、ち、違います！これは その……仕事上急所を狙うのは、セオリーで……」

えっと……ごめんなさいネギ先生！」

顔真つ赤にさせちゃって」

純情だね」

取りあえず、タオル巻け」

「や やいテメエ等！やっぱり関西呪術協会のスパイだったんだな
！？」

……何言ってるんだ？この小動物？

「なっ違う 誤解だ 違うんです 先生！！」

「違うもんか！オコジヨだからって舐めんなよ！」

ハア……相手にするから付け上がるのに。

「わ、私は敵じゃない！……15番 桜咲刹那 一応先生の味方で
す！」

「……同じく、僕も」

「へ？それは、どういう

「ひゃあああぁー！」

！……この悲鳴は……このかさん！？」

「このかお嬢様！？」

「……ん？」

ワッオ♪気配バレバレ♪

「まさか奴ら、このかお嬢様に手を出す気か!?
ノノさん『夕風』を!」

今仕留める事も出来るけど……

めんどくさいな♪

っ訳で♪

「はいどうぞ、そして、いつてらしゃい♪」

「あ、刹那さん!ちょっと……」

悲鳴の方…脱衣所に向けて刹那とネギ少年は走っていった。

一人残されたノノは……

「……………低級の式神だから大丈夫だよね♪

……………さて、晩酌しよ♪」

刹那達の心配を全くせずに、部屋に帰り音羽の滝で汲んだ水?を一人飲んでいたのだ。

探し物は何ですか、見付けにくい物何ですか（前書き）

お久しぶりです。

久しぶりに投稿しました。

賛否両論が激しく連載するか悩んだ結果、書かせて頂くことにしました。

私の書いた物が、皆様にどう思われるか悩んだ結果、前向きに考える事にしました。

要するに私の自己満足です。

それでも読まれてくれる方、嬉しく思います。

駄文だと十分承知してますが、気にいらない方は、『戻る』ボタンを押し、他の方の素晴らしいSSを読まれる事をオススメします。

捜し物は何ですか、見付けにくい物何ですか、

Side ノノ

月が夜空を照らし、部屋も僅かながら月明かりが差し込んで来る。

幻想的で優雅な一時……

しかし、部屋に漂うアルコール臭によって台なしになっていた。

「うえゝリバース三分前ゝ」

「……大丈夫かいな？ノノさん？」

「ノノさんは飲み過ぎです。」

「うゝん、お水が飲みたいゝ。」

一人で飲むのに飽き、晩酌相手を探してウロウロしている中、ある部屋からアルコール臭を嗅ぎ付け入ってみると近衛と綾瀬が晩酌している所を発見！

仲間に入れて貰った次第である。

「はい、お水やでゝ」

「ありがとう、このか……」

「いえいえ」

「ノノさん…酔い覚ましに打ってつけの飲物があるのですが………
試してみますか？」

「なに？」

「これです。」

そうして取り出したのは………

……乳酸ウ○ンの力EXであった。

「こ、これは！」

……ウ○ンの力だよね？
でもなんで乳酸？
しかもなぜにEX？
そして何故紙パック！？

うーん……突っ込み所満載で面白いな」

「ありがとうユエ」……でも酔いを覚ましたい訳じゃないから遠慮
しとくね」

「そうですか……なら明日二日酔いにならないように差し上げます。
」

「ありがとう。」

いらなかったけど……

……シャルのお土産でいつか」

その後、軽く飲んだ後に、リバースを予感したノノは、女子の前で戻すのはどうか？と思い自分の部屋に戻ったのであった。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

……そして数分後、自室トイレにて……

ボタンつとトイレのドアが開かれた。

「……ふう〜、一段落」

まだ顔が青いが、ノノがでてきたのだ。

「少しは楽になったけど、明日は二日酔い決定だな〜……………ユエから貰った奴飲んでみようかな？」

それが危険物？だとわかっていながら、この苦しみから解放されるかもしれないと言う欲望に刈られ、乳酸ウ〇ンの力EXに手を伸ばそうとした瞬間……………携帯が鳴り響いた。

ん？ ネギ少年からTEL？

「……はいはい」ご指名ありがとうございます」ノノです」

『ノノさんですか！？大変なんです！！このかさんが誘拐されちゃいました！』

『指名料は貴方の財布の額まで』

『ちょっとノノさん！？』

「ドンペリですか？

え！？ホントに！？」

『何も言っていないですよ！？』

「ドンペリ入ります」

数は……貴方の財布の限度の額まで」

『ノノさん！！！！』

「……今から追い掛けるから追跡よろしくね。」

「え！？ あ、はい！わかりました！」

「うん、すぐ行くから。………んじゃね。」

遊びはここまで！っと言う感じで電話を切った。

………うん。

やっぱり温泉で気付いた時に絞めとくべきだったな。

コッチの状態も考えてほしかったわ。

「……取り合えず、ネギ少年達を探さなきゃね」

ノノは、部屋を出て玄関に向かうのではなく、窓から屋根に登ったのだ。

そして、周りを確かめ……

「さ〜て探しますかね」……『千里眼』!」

両目に、『気』を込め、千里眼を発動させたのだ。

「何処かな〜? ……うん? あれは……シネマ村かな? なんかいイ感じな建物がいっぱいだな」今度行ってみよ」

搜索失敗。

「……う〜ん? なんでアソコの山だけ桜が多いんだ? !? ……見つけた? いや、感じたって感じかな? !やるな〜あのおじさん」

……別人を搜索成功!

「ハッ橋発見! 食べたいな〜」

…… 搜索失敗。

「凄いな〜！あの建物！全て金色だ！銀色の建物は無いのかな〜？」

……… 搜索失敗。

……… 搜索失敗

……… 搜索失敗

……… 搜索失敗

……… 搜索失敗

搜索するが全て、脇道にそれ、10分が経過しようとしていた時、
駅の近くで赤い『大の字』が発生した。

「わお ♪ ネギ少年みつけた ♪

……… さて、行きますか！」

月が夜を照らす中、一匹の竜が戦場に赴いたのだ。

「え！？りゅう！？」

一人の女性に見送られながら………

探し物は何ですか、見付けにくい物何ですか、（後書き）

短くてすみません……

仮契約風紹介 + α（前書き）

作者の気まぐれです。

パクティオカードを見てたら書きたくなったので……

仮契約風紹介 + α

シャル・N・ダオラ

称号：未来知る竜人

色調：銀 (a r g e n t u m)

数字：???

方位：北 (s e p t e n t r i o)

徳性：希望 (s p e s)

星辰性：流星 (f a x)

―その他―

身長：180

体重：65

タイプ：拳闘士

ノノ・S・ダオラ

称号：踊り舞うピエロ

色調：銀（argentum）

数字：??

方位：北（septentrio）

徳性：信仰（fides）

星辰性：冥王星（pluto）

―その他―

身長：163

体重：49

タイプ：剣士／暗殺者

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

なぜなに麻帆良！

博物館について！編。

・なぜ色々なレア宝があったのか？

シャル達が展示されていた博物館。

実は、オスティア自然公園にある非公開の博物館で、むしろ闇取引で流れてくる宝を保管する所でした。

なので、貴重なアーティファクトや、シャルみたいな化石？を展示？されていたのです。

また、これらのアーティファクトは一般的な博物館や美術館にも闇取引で売られてもいる。

・警備員の強さ

まず最初に警備員の数ですが数名です。

もつと言えば五人。

その五人も用心棒みたいな人で、一人一人の強さはバラけていて強い人でも「黒い猟犬」のザイツェフぐらいなので、全盛期のエヴァと同等以上の力を持つシャルには敵わない訳です。

仮契約風紹介 + α（後書き）

この仮契約カードは、殆ど本作とは関係（？）ありません。

エヴァとシャルの契約の時、カードが出るのか？と思われた方、契約の仕方が違うのでカードが出ないと自己判断させていただきました。

また、質問に対しては、このような形あるいは感想の所でお答えします。

最後に、読んでいただけて嬉しく思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0331i/>

魔法先生と竜人と吸血鬼と.....

2010年10月9日14時51分発行